

當時の慘狀の激烈なる察しやられて思はず慄然たらしむ。萬目悉く木倒れ、樹木枯れ、至る所白煙を吐きてすさまじとも凄じ、試みに杖にて深く地を刺せば忽ち音を發して白煙噴出す、漸く頂上に辿り着きホツと一息し、我れながら快哉を叫ばざるを得ざりき。海抜實に七千尺、僅か二時間の後に達せる也。我れ常に山を登ること平地を行くよりも心地よき也。一步登れば勿論一步の苦しみあり、されど又一步の愉快のあるなり、眼界の漸次展け行くには非ずや、人嘗て余を野猪の如しと評せり、ソハ山嫌ひの言葉也。われ何ぞ斯る輩と山水を語るの愚をなさんや。一散に駈け下りたる所に一軒の宿あり、音に聞えし上高地の温泉なり、主人驚きて何處より參らせ

しにやと問がまゝに蒲田よりと答ふれば、さて〜御足の早き方かな我れ此處に宿を始めて年あり、未だ嘗て斯る方ありしを見ず、そも何時に出立れしぞと重ねて問はるゝに、今朝七時なりと返答すれば驚嘆の目を張りて七時は誰れにても常なるに、さても〜と三度び讚嘆の聲を放ちぬ。時計を見れば十時半也。僅か三時間半を以て日本一の峠を上下せるは我れながら痛快なる哉。

人若し避暑の最上の地をと問ふあらば我れは直ちに上高地と答へむ。

呼べば應へむとする穂高の一萬尺、燒が嶽の七千尺、兀突聳ゆる蓮華の峻峰は欄干に倚りては双眸に收められ、地下より湧出する鑛

泉は滾々として清冽その比を見ず河水飽く迄も清く飽く迄も冷也。氣候暑からず寒からず。附近田代、宮川の池は幽雅にして寂、風景兵に佳絶也。

雄大、莊嚴の字句未だ以て上高地を形容するの言葉に非ず。神秘仙境の好字も亦之れを盡さず、あゝ上高地は遂に我が意を得たる地なる哉。

主人の語るを聞くに燒が嶽大噴火の際には白煙變じて黒煙となり、凄まじき音響を以て山唸り、巨岩の落下する音手に取る如く聞え、一天俄かに掻き曇りて暗黒と成り、日中猶ほ火を點じて辛くも用を辨じたりと云ふ。

翌日天候いと怪しく見えけるが、果して上高地を發して一里餘、一二滴帽を打つよと見る間もあらせず、大雨沛然として降り灑ぎぬ。避けむと欲すれども道は峠にして目的地島々に至る迄一の村落なく、一の小屋なく、避くるに所なきを如何せむ。取急ぎて雨具の用意なかりしを如何せむ。空しく逡巡せば立所に濡鼠となり、凍死の悲運に遭はむと、奮然意を決して先づ『シャツ』一枚となり、上衣と『ズボン』は確つから丸めて結び付け、雜囊は又『タオル』にて之を蓋ひ、麥藁帽を雨具として駈るが如く登り登れりさる程に雨脚益益猛烈を極め、僅か二丁餘を行くに『シャツ』早くも濡れ、帽子の帯は色を溶かして雨水は青滴となり、取り止めもなく手と云はず、頭

と云はず、胸と云はず腹と云はず、染めずんば止まざる勢ひにて灑ぎ立ち灑ぎ立て、紺屋の瓶より這ひ上がりたるが如し。括りたる服、雜囊皆雨を通されて一品の濡れざるものなし。

何より余を恐怖せしめたるものは寒氣也。あゝ地は海拔幾千、風既に冷也。加ふるに此の大雨の烈しさ、凜烈骨に透るを覺え先づ凍えて杖を擱む手の有無を感ぜず、黒褐色の皮膚は變じて蒼白となり、死人の如く見えたるは我れながら心細き限りなり。大聲擧げて放歌しては苦を忘れ、微吟しては自らを慰撫して進む。

我れ斯かる悲境にありたるも山水の景は依然として妙を極め、怪を極め、壯を極む。島々迄の道路皆川に沿ふが故に其中より吹さ

來たる冷氣實に粟を生ぜしむ。

蠻勇と元氣と根氣を以て漸く島々の村に凱歌を擧げたる愉快さ、忘れむとして忘るゝ能はず、幸ひに頑健なる身心、爐邊に暖を收るや忽ち元氣恢復して旺盛元の如し。

◎日本アルプス山下の老獵師

・・・上高地に滞在して居つた時、宮川の池に遊んだ序に四十年も獵師生活を送つてる上條嘉門治と云ふ爺さんを某氏と訪ねた。

此の爺さんは日本人よりも外國人に多く其の名を知られてゐるさうな、色黒くして筋骨の逞ましい爺さんである、土産にと持つて來た酒と肉の罐詰を與へると、満面に笑みを見せて喜びながら、



し戀海し戀山のあ

「有難てえ、己ら酒好きだ、よう来て呉れたのう」

と、大きな丸太を爐の中へ投げ込みながら、

「お前達イワナを喰はつしやるか」

「そりや珍らしいですな、頂戴しませう」

「此れ見ろ、今取つて来た、大きいぢやろ」

と、魚籠の中へムンヅと手を入れて掴み出したのを見ると、未だビ

クク動いてる。

「お前達何うして喰ふだ」

「そうですな、鹽熱にして貰ひませうか」

「よし〜」

と、ばかり、ヌツクと串て突き通し、斜めに爐にさして焼き、冷酒を茶碗に煽つて舌打ちしながら、

「ウム、旨え酒だ、旨え酒だ、お前達も吞まねえか」

「二人とも酒は駄目ですよ」

「ハ、ハ、ハ、そうかえ、そんぢや己れ一人て遣らかすわい、ウム、先日な、△△さんが見えたじよ、己りや道案内して遣つた、△△さんは豪い人ぢやのう」

△△さんとは山水通て有名な△△△△氏の事だ。

「何處へ行つたんです？」

「穂高と焼の峰傳ひぢや」



「お爺さんは何時も案内するんですか」

「己れの所へ異人がのう、よく来るだ、ペラペラと己いらの言葉を喋べるだ、異人にも馴れたよ、毎歳来る人も居るがのう、ツイ五六日前、己れン所へ来て、ウイ……なんとか云ふ酒を土産に持つて来たど、強い酒ぢやたぞ——」

「ウイスキですか」

「ソンぢや、其のウイスキぢや、ソンぢやソンぢや」

爺さんは次第に酒が廻る、僕もイワナの肴を舌鼓打たせながら喰ふ。

「オーツ、お前達餛飩が好きかのう」

「餛飩ですか、好きですとも！」

「そうか、喰はして遣らうかのう」

「ありますか」

「ウン、己りや餛飩が好きだて持つて来て呉れたど」

と、云ひつゝ大きな櫃を運んで来る。

「勝手にウンと喰はつしやれよ、青菜もあるが食ふかい？」
と、顔色を窺ふ。

「澤山御馳走がありますね」

「ナーニ、大した御馳走もねえだよ」

「お爺さんは何が好きですか」

「己れにや好き厭ひ無えだ」

「イワナは澤山取れますか」

「そんぢやのう、日に二百も取れるわ、此の針で釣るだ、毎日乾した奴を貯めて町へ賣出すだ、平均二圓ぢやのう、冬ぢたとな、熊やクラ猪でウンと儲かるだ」

「成程夏は熊も居ますまいな」

「居るもんかい、何處へいつとるか解らんぢや、一體熊は人さへ見ると逃げ出すだ、猿も居るがのう、筈が好きで、今頃は毎日奥へ喰ひにいつとるだよ」

「熊の大きな奴が取れると何うします」

「切つて町へ持つて行くだ、そして子熊はな負うて行くだよ」

「お爺さん、獵ではひどい目に逢つたこともありませうな」

「二度あるだ、一度はもう熊の穴へ這入つたんぢや、熊が外へ出てるもんぢやと思つて穴を塞ぎに行つたんぢや、そしたら突然にウンと唸るぢやないか、一步二歩引き退つて身柄へしやうとすると、野郎何時もなら逃げるんぢやが、此方が退さつたもんだて上りやがつて飛んで來たよ」

「何故また鐵砲を打たなかつたんですか」

「鐵砲は穴の前に置いて來たよ」

「其れから何うしましたか？」

と、二人は熱心に聴く、爺さんが黒緒けの顔は焚火の明りと、酒の
力ちからで赤黒く見える、グイと一杯引つけて、
『夫それから己おれりや熊くまと相撲取すまふとつた、ソそン時頭ときあたまと腕うでを咬かまれた、熊くま
は外そとへ出ると己おれれを突つつ放はなして失うせやがつた、翌日あくるひ足跡あしあとを附つけて打ぶ
ッ殺ころして敵討かたきうちした』

『も一つは？』

『も一つのはナ、己おれれと、も一人居ひとりた、ぢや、其男そのをとこは熊くまの穴あなへ這入はい
り、己おれりや前まへに番ばんして居をつた、所ところが野郎やろう打ち損そこねやがつたもンぢや
から、熊奴くまめ怒こりやがつて己おれれに飛とび付ついて肩かたを咬かぶり附つくんぢや、
丸太まるたで叩たたき附つけたらゴロリと倒たれたよ』



飛驒の鹿間で自分は一先づ足をとどめた、鹿間と云ふは船津町から半重程手前にある三井神岡鑛山のある所だ、日本に其鑛山があるかなと知らぬ者共は首を傾げるかも知れないが、何うして何うして流石は三井の金持ちの仕業だもの、其の規模の大なる、成程々と頷かしめる。

◎再遊の飛驒

「クラ猪と云ふのがゐますね」
 「ナ、ニ、一番人間にビク／＼しとる、張合がねえや」
 と、又も茶碗でゴクリ／＼、
 何時しか夜は更けた、凄い夏の月は穂高の峰に懸つた。



着いた其の晩自分は、も一人の男と寢臺で寢た、所が寢臺で眠ると云ふのは實以て臍の緒切て始めてだ、佳い様なもの、悪い様なもの、嬉しい様な變な様なものである。寢臺は高さ二尺餘り、下は板の間である。「オイ、寢ようか」「ウム、何だか可笑しいな」實際相手の云ふ通り全く可らしい。

夜は何時しか更けた、何んだ斯んだと難癖を付けて居つた隣の男もう赤ん坊の様にスヤ／＼眠つてゐやがる、寢たナと思ひつゝ自分も何時の間にかやらウト／＼した。突然！凄じい大音響が耳元で爆發した、キャツ！夜中に鑛山でダイナマイトの爆發かと、ハツと目を醒ますと、之はしたり！枕並べたる男の影も形も見えぬ、便所へて

も行つたのかと思つてると、板の間でウームと云ふ唸り聲が聞える、變だぞと起き上がつて見ると、「オー痛い」と、尻を擦り擦りしてゐる、「オイ、何うしたんだ？」と訊くと、「落ちたよ」と寢ぼけ聲を發してゐやがる、其の顔付きツたらない。思はず吹き出した。先生餘程眠たかつたんだらう、再びもぐり込んだ。

我輩こりや人事ぢやないと俄かに用心堅固にして眼を閉ぶつた。再び以前の静閑に立ち返つた。自分は又もや夢路の人となつた。突然、バーン、ピシヤンと以前にも優さる大きな音がする、ハツと眼を開くと、大將今度は容易に起き得ない、切りに頭を擦つてヒーヒ云ふてゐる、「同情するよ」と云ふや否や僕は夜具を頭からトツ被つて

腹を抱へた、男は何だかガサ／＼音させてるから密つと夜具の隙から覗くと、小言をブツ／＼並べながら一枚々々寢臺から夜具を板の間へ下して敷いて御座つたが、やがて又其の中へもぐつた、大方寢臺は恐いものと夢にでも見てるだらう。

翌朝「小父ちゃん／＼」と僕を誘ひに來た子が居る、西村と云ふ醫者の愛兒政雄君だ。「オヤおちちゃん未だ寢てるの寢坊だなア」と吃驚する、「ねー起きよー、坊やと遊ばふよー」と、身體を揺する、「仕方のない兒だなア」と云つて遣ると、「だつて坊や獨りて淋しいものー」と至て戀人の様な口をさく。根が子供好きの僕だ、早速飛び起きて顔を洗ひに行くと、後から連れ立つて來てヂツと見詰め

てゐる、見れば見る程可愛い、兒だ。「今から御飯喰べるの?」と訊く、ウムと頷いて遣ると、「早く遊ばふよー」と確つかり帶を持つて離さない。飯もソコ／＼に済まして外へ出ると、「學校へ行かふよー」と云ひ出す、仰せの儘になると、ブランコに乗らうの體操を遣らうのとせがむ、「おちさん閉口したよ」と思はず獨言すると、「閉口て何?」とくる、何んて無邪氣な子だらうと覺えず林檎の様な頬にキツスすると「おちちゃん去年も僕の頬べた吸つたね」之には流石のおちさんも降參した。

旨く欺まして學校を出ると、僕に汽車を買つてくれの、ピストルを買つてくれの、自動車を買つてくれのと遠慮會釋もない、よしよ

しと願ひを納れると『吃度だよ、嘘付くの厭だよ』と念を押す、押される丈けおぢちやん信用が無いなア。

フイと思ひ附いて其の儘一里も絶頂にある前平へ行く氣に成つた、前平と云ふのは鑛石の採掘所から少し離れた所、合致してると云つても差支へ無い位。其の頂上へ採掘した方鉛鑛、亞鉛鑛を巧みに鐵索で下部の鹿間まで送る、下部では俟つてましたと許り其れを受け亞鉛鑛は鑛石のまゝに、方鉛鑛は純鉛として富山へ積み出す、だから當日採掘した方鉛鑛は當日立派な鉛と成つてゐる、飛行機に似た箱は間斷なく空中を往來する、見てゐると面白。

鹿間から其の前平まで道險阻では無いけれど兎に角山道だ、始め

は樹木が一本も無い禿山だ、漸々登り詰めると緑なす山を迎へる。自分は平地を歩くよりも山地を歩む方が痛快だ、だから險になれば成る程足が早く成る、餘程早く前平に着いた、一見して採鑛事務所に行つて、吉澤工學士に面會に行く、附手を頼む間も無く、其處に幸ひ見覚えのある吉澤君が立つてゐるから『吉澤君』と呼ぶ、勿論言葉を交はすのは今が始めてだ。

吉澤君は妙な顔をしてゐる、早速名刺を出すと、『やアよく來たね、まあ這入り給へ』と導く。

名を見て吉澤君も僕を知てると云ふ、吉澤君は今でこそ工學士神岡鑛山副取締など、濟ましてゐるが、昔しは仲々以て〇高にゐた

時分は柔道で盛名を斯界に馳せた豪の者、餓鬼大將の親玉だつた、
 「變はれば變るものだなア」と云ふと「ナニ、昔しても今でも元氣
 はちつとも變らんよ、まさかと云へば此の腕を振り廻はすさ」と
 鐵腕を叩いて撫然としてゐる、所謂肝膽相照らすと云はふか談論風
 發口を附いて出る、傍から水瀬君が僕も仲間入りをと席をすゝめ
 る、興更に加はる。所へ取締役の小田工學士が「やア暫らくだつた
 ね」とニコ／＼遣つて來る、其處で舌火は直ちに小田君に飛んで互
 に角けず劣らず山水論で花を咲かす。唯さへ涼しい飛驒の其のまた
 山だから熱いなどは思ひも寄らぬ、恰度春の様な暖かい順候、戯
 談にも熱いなど云へぬ、風は絶え間なく吹いてるし、形容し難い



あつぱれ 色男も
 代ふしだ

てうち

佳い心地だ。
 暫らくして坑内へ這入る、其塵着物を着てると、直ぐ眞黒に成るからと去年の様に汚ない洋服を着せられる、着て見て人知れず硝子に寫つた我が姿を拜見したが、もし此の髻を取つたら少しも工夫と變はつた所が無からうと獨り合點する「一層工夫に成つたら何うだい」と吉澤君僕に戯談ふ、天晴れ色男も代なしに成つちやつたよ。
 鳩谷君と共に暗へ暗へと進んだ、此處は石炭鑛ぢや無いから瓦斯爆發の心配なんか入らぬので安全燈を排してアセチン燈を用ゐてゐる、光芒前者とは劣らない、それを照らして行く先さく／＼で行手の鑛石はピカリ／＼と輝めく、這入りかけは非常に寒い様に思ふたが



馴れて見ると格別の事もない、四季の温度は變らないから冬なんか結構だと云ふ、時々ゴ—と四邊に反響して積んで鑛石を箱に入れてレールを馳しらす音がする。探掘所でカチン—遣つて居る所へ來ると、鑛脈に鐵棒を打ち込んで恰んど二尺許りの深さに至らしめ、其の中へダイナマイトを挿し込み、其處に居合はす鑛夫等は他所に難を避けて火を附けると、やがて凄まじい爆聲があると共に、馳け附けて見ると、大きな鑛石が鐵を張り詰めたかと疑はれる天井から見事に墜落してゐる、成程此處事して得るのかと始めて知つた様な仕末。

坑内でもものは平坦の様に素人は推意するかも知れぬが、百尺に近

い階段は幾つとなくある。全て二階へ一寸てな具合だ。雲突く男許りが鑛夫だ、前科者許りが鑛夫だと思ふて居たが、女や元氣ある青年なんかもセツセ働いてる。

『他の鑛山は何うだか知りませぬが神岡の鑛夫は皆温順ですよ、一つは土着の者が過半数ですから』と鳩谷君が説明する、續けて又、『鑛夫にも一日働いた丈けを酒に費ひ果たすものも居るが仕業を濟ませた後に疲れも厭はず山を擴いて野菜を培養する殊勝な者も居ります』鳩谷君は感心した風に云ふ。僕も感心した風に聞いた。かれこれ二時間も引張られてたので『結構です—』と賞めちぎつて再び坑外へ出ると、今迄暗の中で寒氣の爲めに息の白かつたのが何時の

間にやら失せて仕舞つて物足りない氣がした。早速湯を浴びて身體を淨め、一休憩してフト眼を外らすとツイ側面に當たつてザラリと土砂を流した様な急峻がある、恐ろしい峻はしい山だ、己れに登つた奴が居るかと言ふ面構、ムーツと癩に障つたから「一寸御免」と座を立つて下駄履きの儘でステツキを手に持つて一散に其の下まで駆け付け元氣満々として登り始めた、登ると云ふよりもよち上ると形容した方が適當かも知れぬ、大石、小石、土砂のみで全て上から轉ろげ落したかと云ふ風。人の足跡とて無論あらう筈が無い、一足登るとは半歩下る、其の度毎に僕の身體の重量に堪えない石や土砂がザーツと崩れ落ちる、稍もすれば危くも其の儘轉げ落ちさうだ。もう

ステツキは入用ないと其處へ投げ付け、四ツ這ひに成つて這ふが如くに登つたが、手をかける石は身體の重さを支ふ迄に至らずにグアラ／＼なだれ落ちる危険云ふ計り無い。殊に最もヒヤリとしたのは一大石があつたので此れ大丈夫とウンと其に足を踏むと、ズーツと引かれる氣持、變だぞと逸早くも側へ其の足を退けるより早く、大石は凄まじく音立て、巨人が上より投げ付けたるが加き勢ひを以て彼方に衝突し、此方で火を打ち見るも恐ろしい途度で落下した、其れを見て思はずヒヤリとして用心に用心を加へて登つた、頂上に近づくに従つて益々急、殆んど手の附け様もない、辛くも一方に血路を見出して漸く登りつめ思はず快哉を唱へた嬉しさ未だに忘れな

い。其處で眞裸となつて息をつき、さても眸を放てば立山、白山の諸高山は見えないが、長蛇の如き山脈は或は雲に蓋はれ、或は霧に囚められてゐる。船津の町や鹿間の精錬所が脚下に見下され、神通川の上流又美しい。僕の山好きなのは蓋し眺望が雄大だからだ、浮世に超然してゐるからだ。

もう寒くなつた、登りは登つたものゝいざ下り様と密つと下を見下ろすと、至て屏風を立てたが如き崖だ、之れを無理に下りる時は轉ろげ死になることは火を見るより明か。試みに傍らの石を拾ひ上げて落して見ると、途中で止まらずに其の儘急轉直下の勢ひで下に達してゐる、死ぬ覺悟なら下りても見ようが此の平凡な生命でも今少



鉦夫
勤務
交代

て・ネ

し入用んだ、あたらむざく殺すのはチト惜しい。再考して四邊をぐる／＼見廻すと恰度その裏面に當たつて同じく土砂を流した様な箇所がある、斜めになつてゐるから餘程都合がいゝので先刻程の面倒もいらす揚々と大手を振つて下つた。道路に出ると、もう今日の業務が終つたらしい、鑛夫や監督者がゾロ／＼前平に歸路を急いで居る。其の澤山の鑛夫に交つて帝大の校帽を被つた一人の男に出會つた、ハテナと首を傾けると、彼方もヂツと不思議な男が下山して來たわいと僕を見詰める。變だぞと思ふて事務所へは行かず直ぐ其の足で前平の吉澤君の役宅を訪ねるとモウ歸つてゐる。

吉澤君の宅は眺望絶佳だ、船津や鹿間や諸連山總て一目の裡に收



まる。家も新らしい。庭には月見草が咲いてるから「却々君として
 感心だな」と云つて遣ると、「之れでもしほらしい所もあるよ」と髯
 を撫してゐる、しほらしいが奇抜だ。早や十年來の知己の様だ。忽
 ち酒を呼んで痛飲し、盃を重ねるに従ふて氣焰萬丈。「時に君、僕
 今日帝大の校帽を被つてる男を見たが一體どうしたんだい？」
 「ウム、彼か、是非君に話さんければならぬ、名前は堂徳清之助と云ふん
 だ、實地研究旁々自ら工夫となつて眞黒になつて働いてるよ、今時
 に珍らしい男だ去年も來たよ、一昨年は佐渡の鑛山に居つたとか、
 日給として四十錢を渡してゐるが感心だらう、少し東京へ行つて吹聴
 して遣り玉へ」僕はツク／＼今度といふ今度こそは眞實に感心して

仕舞つた、確かに豪い、逢ひたいものだと思ふてる矢先、御免と云
 ふ者がある、やがて堂徳さんと婆が取次ぐ。
 早速通して初對面の挨拶した後「感心ですね——」と賞め稱へて
 遣ると「少しは知つて置かねば駄目だと思ひまして」と語氣の中に謙
 遜の意が含まれてゐる、脊の高い體格の強健な男だ。餘り喋べらな
 い、吉澤君に種々將來の方針や何かに就て注意せらるゝと、膝も屈
 さずに「ハッ」と熱心に聞いて居る、頼もしい。
 僕は小田取締役に面會して少し話さねばならぬ用事があつたので
 中座して失敬した。外は眞暗、星がまばらに輝めてゐる、之れが
 月夜なら確かに詩の一つも出たらうになど、思ひつゝ小田君を訪づ

ねると、『よく来た』と座敷に通し、直様胡座をかいて快談する、僕は例の少しも遠慮の無い男だから大將も大いに喜んで互に打ちつけた。

小田君は一言以て評すれば社交家だ、人を外らさずに始終ニコニコ然として巧みに話す、人の長となるには斯うて無くちや不可ん、馴れたものだ、年は三十とは若い、成功する人物だらう、歸つたのは十一時、吉澤君はもうグツスリ寝込んでゐる。

翌日吉澤君は事務所に出勤する、僕は日南の快舉録を再び播いた、日南は流石は當代の痛快文士だけあつて、明快な書振り、キビキビとして各人紙上に躍如してゐる、殊に各章末に獨特の批評を加

へてゐるが、裁斷恰も滴たる名刀で見事に頑敵を切り捨てた様な趣きがある、讀書時の移るのを覺えなかつた。

吉澤君が歸へると、早速酒を呼び腕をまくつて氣を吐く。吉澤君は知る人は知つては居らうが、中學時代。高等學校時代は腕白此の上も無かつた、教師も手を引いた、然しながら彼れの氣骨のある點と、行爲の堂々たるには誰しも尊敬の念を拂ふのを惜しまなかつた、身體こそ少さいが膽飽く迄も太い、其の證據には嘗て足尾でストライキの張本人であつた鑛夫が旨く此の鑛山に化け込み、巧みに無智の鑛夫を煽動して小田取締役の不在に乗じ、五百人の暴れ者が手に／＼棍棒や鋏をたづさへ、事務所目がけて一氣に寄つた、其の

時恰度吉澤君が一時代理で取締役だつたのだが、此の有様を見て、他の下役のものは皆歸へし、自分と水瀨秘書役とのみ残つて張本人の五六人を足下に呼び付け、一應其の述ぶる所に耳を傾け、さて顔色動せず『貴様等の云ふ所は此胸にをさめた、結果は何う判断するかも判らぬ』と嚴然と云ひ放つた、張本人共は多數を頼んで稍もすれば危害を加へ様有様、外では他の鑛夫共焚火を至る所に起して虚勢を張つてワイ／＼今しも事務所を一叩きに叩き潰す勢ひ、吉澤君は突然立ち上がり叢がる鑛夫の中へ飛び込み双肌脱いて、ドツシリ座はり『貴様等己れの云ふ通りにならぬかッ、ならねば此の吉澤を殺して其れから勝手にしろ』とギツと四邊を見張た。鑛夫共は其の

大膽なのに吞まれて一旦退ぞいた。翌日に成つて悪いと思つたのか、前非を悔いて謝罪に來たから順順と訓戒を與へた。其れからと云ふものは鑛夫の頭共は吉澤君に敬服した。吉澤君は上役だからと云つて言葉を改ため、鑛夫だからと云ふて決して侮蔑しない、上下同じい語氣だから、氣の荒い鑛夫共も大變懐く様になつた、だから吉澤と云へば神の様に思つてゐる。僕思ふに此慶事は何んの吉澤君に取つては朝飯前のことだ、同時に君で無くちやと思ふ。趣味として支那の漢書を読み、或ひは英傑の傳記を読み、それ以外には目を通さぬ、小説は？と訊くと、今の小説は皆若い男と女が結局妙な具合に終るに定まつてるから馬鹿らし

くて話せ無いと云ふ、あゝ吉澤君は我が意を得た人物だ。

聞けば一度は代議士となつて議會に立つて見せると云ふ、若し此
 麼男が議場に立つたなら、そら蒙古王の再現ぞと腐敗せる議員共は
 ピク／＼するだらう切に怪傑吉澤謙太郎君の自愛と健在をいのる。
 今前平の役宅に居つて婆一人雇ふてゐるが、總ての點に於て不自由
 なこと夥だしい様子だつた。誰れか其の邊に此麼男を見込んで、娘
 を遣りたいといふ人があつたら喜んで世話する。何時でも僕に申込
 み給へ。

吉澤君に鹿間に話せる奴が居ないかと訊くと、居ると云ふ、何麼
 男だと尋ねると、小原應義と返事する、よし來たと翌日下山して小

原君を訪問した。

「やアよろこそ、先刻吉澤君から電話が掛かつて」とニコ／＼して
 ゐる、もう孰方も直ぐ打ち解けた、奥様に應て紹介されたが素敵の
 美人だ、その上到つて愛嬌がある、小原君は當鑛山唯一の外交家て
 無くてはならぬ人物だとチラと吉澤君から聞いてゐたが、果たして
 旨いものだ。その奥様は今云ふ通りだから申分もない夫婦だ、子供
 が三人居る、其の中の今年六歳になる女の子は可愛いことは申すに
 及ばず、その賢いことゝ云つたらもう感心して言葉も出ない、僕が
 小原君その談話を横にゐて聞いて居ながら「オヤあぢさん東京なの
 ? 私の御父様も東京なの、ねえ御父様さうてせう?」御父様がウム

と頷くと『あたし東京の方好きよ、おちさん遊びませうね』と早や背中へ手が掛かる、其れに相手に成つてゐると『御客様に何んてす?』と小原君が故意と睨めると、ハイと返事するが早いのか『おちさん御免ね』と丁寧に御詫する、嬢ちゃんは別嬪さんだね』と口弄ふと『オ、恥かしい』と袖で顔を隠して仕舞ふ、其人懐こいつたら云ひ様が無い『妻君は美人だし、子供は斯うだし、嬉しいてせう』と遣つて退けると『ヤーどうも』と頭を搔いてゐる、小原君も僕の急鋒には降参してゐる。僕は其の晩奥様の心盡しの御馳走に陶然として酔ふた。さらば懐かしい飛驒の地よ。

◎上高地まで (某女教育家と)

「又富士へ? 富士なんか平凡だよ、誰れでも登つてゐるぢやないか、殊に女なんか無数に行つてゐる。彼處所へ行つたつて功名でも無ければ手柄でもないさ、宜しく未だ女の足跡の印せぬ——例へば日本アルプスの様な大自然に接しなくちや、——殊に女として未だ嘗て踏破したものがないから、同じ行くならアルプスだ、アルプスだ。あの雄大あの豪壯あの神秘的な仙境、呼べば應へむとする一萬尺眼を眩ずる様な御花畑、千紫萬紅に變化する雲の色、高山の月! 水は飽くまでも冷たく清冽! 静寂神の眠りませる如き池畔、實になんとも形容が出来ないなア、僕はもう聽て又再び行くんだよ、いいなア……………」

と、滅法に吹いたもんだから、薰子夫人妙に心が動いたのか、ヂツと黙つて聞いてゐる。大分あてられたわいと思ふて、

『どうです、富士よりか日本アルプスにしたら』

と、探つて見ると、早くも感應があつたらしい。

『ぢや私も一緒に御供しますわ、……此れまで女の人登つてませうか』

『さア、私の耳にしてゐる範囲内ぢやまだらしいですが』

誰れも行つてないのなら私も恐いから厭だと返事するだらうと思ふてると、

『ぢや猶更私行きたいわ、女が若し澤山行つてますと、存外つまり

ませんからねー』

流石に着眼點が凡を抜いてると稍感心し、僕は更に一の條件を出した。

『ぢや私として申分がある、それさへ御承知なら喜んで同伴しませう、條件とは外でない、第一旅行中僕はあなたに男として對すること、第二白粉を澤山塗らぬこと、第三弱音を吹かぬこと、之れだけだ、サア何うですか？』

と、切り出すと、

『第一はあなたの勝手、私として容喙を入れる權利のものぢアありません、第三は私は人に負嫌ひだから大丈夫、第二の白粉を云々と

云ふその理由は？』

『そりや何でもないとす、人跡稀れな所て白粉なんか塗る必要を認めないから、……其意味よりも自然へ入つて行くんだからおのれをも自然にしくちやと云ふ……云はゞ赤裸々にして行つた方が興味ありと思ふからす、但し旅館内では構ひません、イヤそれよりも白粉なんかの奇麗な所を見せると行く村々の娘共がトンだ眞似をしたがつて爲めに虚榮心を喚起させたりすると、罪深いこと夥だしいのみならず第一國家に對して……』

『まア！』

と、晴やかに笑つて、

『え、宜しゆございます』

斯くして日本アルプス行きの相談が纏まつたので云はゞ偶然の發作に過ぎなかつたのだ。

八月一日朝九時飯田町から出發した。此の日薫子夫人の扮装はと云ふまでもなく髪はあつさり束髪、輕そらな浴衣、帯は何か知らぬが兎に角ピカ／＼と金色に光つてゐたよ。

甲府まで殆んど隧道ばかり、之には大將すつかり參つたと見えて中途からベルを出して被り始めた、非常にうつりがいゝのにヂツと見据える。

漸く倦怠の思ひがする、鹽尻を過ぎてホツとすると目的地松本へ

着く、前夜電報を打つて知らせて置いた野田君が自轉車で待つてゐる、實に堂々たる紳士振に讚嘆之れを久うし、『やア暫く』と手を振り、直ぐさま腕車を飛ばして其の家に着く、『野田醫院』と木の香り全く失せ遣らぬ看板は近く開業したんだなアと頷かせた。家作りが新しい、御醫者も新しい、妻君もおまけに新しい、何でも新しいづくめだ、その上疊まで至極新しいから『妻君と疊とは新しいのがい』の格言めいた言葉は暫らく御無用だわいと頷く所あり。野田君、よほど此の己れに逢つたのが嬉しかつたのか眼に涙を湛えてる仕末、座は稍悄然たる有様だ。これぢや初對面たる薫子夫人は何が何やらサツバリ解らぬから、吃度私の様な見ず知らずが居る

から氣を使つてゐるのだらう御氣の毒なと云ふトンだ感ちがいに意味を取られては迷惑至極だと思ふて、我輩一寸君來いと野田君を薄暗い所へ呼び付け『精一杯晴れやかに元氣を出してくれ、そうてないと僕が困るから』と云ひ含め、やがて三人は家ぢやとかく氣が減入るからと、再び腕車を飛ばして一里餘ある淺間温泉に俗塵を避けた。

その途中暗を透して朧げながら眞黒な日本アルプスが窺はれた。そして山の麓に點々せる光りと、無數に少さく輝く星とは四邊りののびやかな眺めに相應して面白く感ぜられた。三人は今までと全く違つた此の風趣に一方ならぬ旅味を覺えざるを得なかつた。

電話で先きに知らせてあつたので、旅館の用意萬端足りなく、一番眺めのいい綺麗な室三つもあてがはれた。何よりも最初に嬉しかったのは瀧の音であつた、東京に住んで以來で耳にしなかつた水の音は旅行と云ふ感じを強く印象せしめてくれた。

『冷めたい涼しさですわねえ！』と薫子夫人が云つた時、その冷めたいが傑作だと思ふた。旨く形容したもの、全く冷めたい涼しさ。だから浴衣一枚でヒヤリ〜と寒い。それでもシャツを着けるのも臆ぢだつたから『寒い〜』を連發してゐながらも辛棒してゐた。やがて案内せらるゝがまゝに浴場に行つた。非常な綺麗な湯、透き通つて清水の様だ、けれども稍熱い、これには困つた、オイそれと云



ふ具合には行かなかつたから幾度か手拭て身體を浸しながら漸つと沈む、うつとり瞑目してゐる間に長い汽車の疲勞が刻々逃げて行く様にいゝ氣持ち。

「御馳走は出来るだけ、美人も出せ」と注文してあつたのだから、聽て大きな一つの盆に運ばれる、「今晚は！」は優しい聲が三つ、かず枝、春枝、モウ一人の名は？え、と、あいつ醜ともないので名前前はツイ忘れたつけ。

酒が廻はるに連れ野田君一人でハツシヤギ廻はる、あまり藝者を戯からうもんだからその内の洗髪のかず君ブンとふくれると、「まあ怒りたまうな、たゞさへ好くもない顔が益々恰好が悪くなるぜ」と、



皮肉られ、ブン／＼柳眉を逆だて「なんて此座敷へ出たのか知ら」
てな顔付、實際全くすねて見せる程の美人でもない癖に！

其の裡野田君めつきり御醫者さんの不養生を起し、見る／＼眞蒼
になつて、黙つてうつ伏したので、我等大に同情を表し、三妓を頤
て指揮してどうやら床に就かした、時計を見ると一時、慌てた様に
一同を追ひかへした。そして僕は再び箸を取上げて生きてゐる様な
鯉の刺身と其の羹ものに手をつけた。

僕つらく／＼推んみるに彼等三人の藝妓は薰子夫人をチロリ／＼と
不思議さうに見つめて何者だかと不審に打たれてゐたらしかつた。
その筈さ僕及び野田君は友人に對する言葉使ひて薰子夫人に對する

し、夫人は黙々三味線の音に温順しく耳をかたむけて、その様いと
も慎ましげだつたから、ソレジャ者とは無論思はなかつたらしい、
屹度奥様だと鑑定は付けたらしいが、鑑定はつけたものゝ矢張り何
故こんな女の方が私等と呼んだのだらうと云ふ顔付して暇さへあれ
ばジロリ／＼。必ずや襖の蔭で「あの人は？」が御互に發せられたこ
と、察する。

「君は隣室だよ、僕は此方だ、失敬」と薰子夫人に左様ならして野
田君の側でグーツと五體を心よく延ばすと共に酔は一時に起つて頭
の中でゴーツ、いつの間にか深い眠りに墜つて仕舞つた。

フと眼が醒めると、日はカーンと高い。見渡せば乗鞍の峻峯萬雪

を頂いて兀突、それに連なる日本アルプスの雄姿はいとも嚴かに雲をしのいでゐる。「いゝなア」が暫し互の口から自然に溢ばしる。ずつと手近にある小高い山が如何にも美しかつたので、所謂こんな山が「あの山越へて」の口語詩に相應しいんだらう、野田君にそう話すると、「如何にもそうだ」と頷く。その麓にある白壁に小さい子守の娘が口吟んでゐる概に思はれて仕方がなかつたが、手近の山と云つても随分の距離、赤ちやんをおんぶしてゐる子守さんなんかとてもとても見える筈がない。

松本に歸り、休憩、愈々島々に出發する、腕車が村々を通るごとに美しく化粧した夫人の姿をはた織る手を止めて珍らしさうに見送

つてる。其顔が如何にも不意に一大發見でもした様な顔付だつたので、僕は又それ等の者達の顔を珍しさうに見詰めた。島々を去る半里ばかりに橋梁を新たに作り代へてゐるので人力車止、おかげで急流を渡舟、夫人は先づ茲で度膽を冷やりとさせる。馬車でガタ／＼と夥だしい震動に身體の中心を左に右に、清水屋の二階で始めてホツとする。

夕方空を見上ぐると、いとも怪しい雲行、明日の天候を氣使ひ不安の念に驅られながら夢を貪る、フと、うと／＼しながらもポツリポツリと屋根に灑ぐ一滴二滴續いてバラ／＼と音の烈しさに、こりや駄目だな、斯うなりや何うでも勝手にしろと高を括つて又グツス

リ。隣室のガヤ／＼するのにまどろかならず、仕方がないからと楊子片手に下におりて山を見上ぐると、黒雲走り雨そよぎ、とても晴れさうな様子も見えない、夫人は何うしてゐるだらうと訪ねて見ると、チャンと疾く起き上がつてゐてチツと空を見詰めてゐる、『やアお早よう』と聲かけて入ると、なほも空から眼を離さず不安そうに、『まア何うしませう、私し三時頃から起きて睨めつこしてゐるのよ』に『え、』とばかり飽きられ返へつた、三時と云へば未だ眞暗なのに、さてもよく／＼氣掛りになつたと見える。『こんな所に一日チツと暮らしてゐたら何うなるてせう?』と心細い聲、『小歇みになつたら小々位の雨は構はぬ、出掛けようや』と元氣を附けると

之に稍勢を得たのか『え、さうしませう、さうしませう』とさうしませうを二度も繰り返へしたのを見ると、よほど歩きたかつたらしい、顔も次第々に活々として來た。否單に顔のみぢやない、あの烈しかつた猛雨も何時しか影をひそめ、青山の頂き微かに時に雲の色さへ白く閃めいたので、僕は下に駆け付け『どうてせうか』と御かみさんに訊すと、一寸心ばかり首を出して『大丈夫です、ちつとも降らないかも知れませんが他の御泊りさんも皆出發の用意をしてゐますよ』と平氣に云はれて勇氣頓にあがり、二階へ駆け上がった、『出發よーい』とハツシヤギ出したので、夫人も茲に始めて晴やかな笑ひを洩らして『まアさう?』と嬉しさう。少からぬ荷物は昨夜わざ

わざ頼んだ人のよさそらな丸山人夫に預け、之で萬端すべてとのひ八時半他の客より早くも後れて出發した。己れの元氣のよさ、夫人の元氣のよさ、草鞋も軽い、足も軽い、さぞ一舉に上高地へと、それはそれは恰も瀬川に湖る鮎の潑刺な様、十里はるか千里の道もへツタ微塵と云ふ凄まじい顔色！足並！この勢なら後であんな噴き出す様な悲喜劇も起らなかつたのだが………。

さる程に登るにつれ梓川の上流の美しさ、水の綺麗さ、巖に激する清流は碎けて白雪と散り、或は魔も住むかと疑はる深潭と變はり、巨岩或は伏し或は怒り、奔流その間を縫ふて木の間に隠見する所えも云はれぬ面白さ、瀧酒とも云へよう、豪壯とも云へよう、時

に楊柳のさよくと水に戯ひれてゐる風情は先づ第一に我等の歎賞を捷ち得たものであつた。

二里程は健脚の前へ進むに任せ、折節道の傍らに横はる苔蒸す巨巖の下よりチヨロくと水晶を溶かせしが如き水の湧き出るあるのて、夫人試みに手杓にて之に口あて思はず驚歎の聲を張り上げて、「オ、オア冷めたい！」と呆れかへつて二杯三杯と呑み續けるので「ドレ己れにも貸し給へ」と奪ふが如く素早く、グートと呑み乾すと、口は今も凍りつけられるような冷やかさ、玉なす汗は急ち再び体内に吸収されるよう、ブル／＼とつめたい。

それから一里半程は無事無難、この様子なら三時までには上高地へ

着くだらうと人夫と叫び、又急に碧瑠璃をみがき出せるが如きあの
 大空は夫人が眞暗の未明から大願成就を祈つた甲斐があつたから
 だと大に花を持たせ、婦君それ自身も亦『お天道さまは物が解つて
 よ、貴方々は私に感謝しなさい』とまでは大威張りて小々當てられ
 意味だつたが、愈々名にし負ふ徳郷峠の勾配に差かゝると、今までの
 夫人の様子がガラリと變つて、十間行つては休み二十間進んではへ
 タ張り、あの活々してゐた顔色さへ唯ならぬ、自分の蒲柳の質をす
 つかり棚に上げ『身體が疲れたんでせう、平生は此處でせうね。三時
 りませぬのに……屹度昨夜より眠らなかつた其の故でせうね。三時
 から起きてたんですもの』同情を表して欲しい模な瘠我慢の様な云

分、『イヤ足の方が勞れたんでせう?』と訊くと『足はビヨン／＼し
 てゐるのよ、大丈夫なんだけど』それがチと怪しいて。
 半里登りつめた清水の傍で晝飯をしたゝめる約束だつたが、此の
 鹽梅ちやとても思ひも寄らぬこと、負けん氣の強い夫人は如何にも
 屠所の羊らしく見えたので試みに『此の邊で晝を喰ひませうか』と、
 わなを投げて見ると待つてましたと許り『どうぞ』と蘇生の思ひ、主
 イエスの聲とも耳に響いたんであらう。イエスは馬小屋の中で飯を
 喰つた筈だが、薫子夫人は溪間の清流の咽ぶ大きな岩に腰を下ろし
 て『やれ／＼』とばかり。
 半時間に餘る大休憩に身心悉く舊に復したらし、『歩みませ

う、大丈夫よ」と口を切つたものゝ氣掛りになると見えて、密つと人知れず峠を見上げてゐる。「いざそれぢや」と、再び足踏みしめた。

あれ程休んだのだから屹度その甲斐が現はれてるに違ひないと思ふてたのにコハ又何うしたこつたい。少し進んでは腰かけた都合のよさそうな所があると、慌てゝ駆けよつてグナリとなるんだもの、己れは其處ことは知らないからサツサと歩いてフイと振り返つて見て、姿が見えぬので屹驚し、オヤと慌てゝ走り戻ると此の仕末「かアちゃんいゝ子、かアちゃんいゝ子」と、赤ちゃんをすかす様にする」と「まア！ぢや御賞美ちようだい」と戯談とは知りながらト

ポく歩む丈けても可愛い。それでも隙さへあれば憩はむものと木の切株や石の横はれるに眼ばかり働かすので油断はならぬ、だから人夫君と眼と眼てしめし合はして、僕等はわざと聞えよがしに、

「ねえ君、君も随分此處商賣してゐるが、こんな強い足の女は珍しいだらう？」

「ほんとだよ旦那、俺等達も協ひませねえだ」
 薫子夫人始めの裡は此の言葉を大に信じて、切株二つまでは見遁したは宜かつたが、三つ目になると協ひませねえだが露現したのか控かと坐はつた儘不動の様にうごかぬ、今度は手段を代へた人夫さ

ん「茲て休まつしやるよりかモ一寸登つた所にいゝ水があるだア、
いゝ水だアよ」

水！と聞いて薰子夫人は顔を擡げた、云はゞ彼女は此の時希望を
持つた、立ち上がった、歩いた。登れど登れど………。

「水どこ？」

と、泣きたい様な聲、全て「かアちゃんお乳」と一對だ、

「ホラ見える、ホラ向ふに黒い桶が」

と、僕は遙か上の方を指さすと、「まあ嬉しい」と重げに足ひさずつ
て急配をあへぐ。

桶と云つたのは眞赤な嘘實は巨木の苔蒸したのが筐の中から一寸

道端にのぞいてゐるので如何にも桶らしく誰れにも思はれるのであ
つた、先着して待つた僕はグーツと下を見おろして、故意と頭を
洗ふやら口をすゝぐ真似して「オ、冷めたい」と大聲あげて喜ぶの
で、夫人乗氣になつて息づかひ急わしく登りつめて「水はどこ？ど
こ？」と汗たらく。

「化物の正體見たりな枯尾花アハツハツハ、ハ、イヤどうも御苦
勞さま、茲まで来れば占めたもの、ソラ頂さが見える、頂さが、ホ
ンのつい其處だ」

「いゝえ、も信じませんよ」と、ていでも無くちや動かばこそ、所
が此のあたり意地の悪い蚊がゐて、わけて夫人目がけて突喊するこ

と云つたら首と云はず、顔と云はず脊と云はず。詮方なくも又ソ
 ロリく、ともすればそれでも立ち止まるので、「又？」と訊くと、
 「まあい、景色なこと！」ナニどころも見えやしない。慰めすかし、
 なだめ賞め、仁丹をふくますやら大騒ぎ、遂に絶頂へ！
 絶頂！之れから下り坂！薫子夫人の態度は急に變はつた、顔は喜
 びて紅潮を帯びた、聲も華かに透つた、その元氣のよさと云つた
 ら！

「もう休まなくつたつていゝのよ」と別人の様になつてズン／＼歩
 いて其の云草が白々しい「私し何故先刻あんな弱虫だつたんでせ
 う？」して。

急ち現はる穂高の靈峯！オ、我等が眼前に！僅かに溪をへだて、
 神々しくも雄壯にも！靈氣颯々！覺えずブルツとする。
 生れて始めて自然の玄妙に觸れた彼女は其處にひれ伏さむ許りに
 驚喜した、三嘆した、息を呑んだ。眸大きく優しく美しく晴れやか
 に！彼女は茲に始めて山を知つた！偉大を知つた！！
 三人は均しく杖を止めて暫し見惚れた。

それからの景色はガラリと變はつてスイツルの山の中を歩いてる
 様だ、白樺も久々に珍らしい、何よりも美しいのは水だ、譬へ様も
 ない清冽と冷めたさ、芝生の廣々とした様な所もあり花も様々に妍
 を競ふてゐる、潺々と小川のせゝらぎ！！夫人はすつかり參つて仕舞

つて、『世の中に此處所であつたんでせうか』

夫人と云へば鼻息の荒つぽいと云つたら！一舉に上高地まで踏破せんずの勢ひ、之れには重荷を擔つてゐる人夫さん閉口して、『今度は己が切株を探がさなくちやならねえだ』

試みに夫人に戯談半分『休みませうか』と出る『いゝぢやありませんか、歩ませうよ』と匆ね飛ばす猛烈さ。そして静御前が義經をたづねる様にイソ／＼歩き、限りなき絶景を幾度か振りかへり見ながら。

上高地に着いた。

◎赤城山城湖畔の一夏

隣り座敷の旅立つ音に、フと目覺めた。

障子を左右にカラリと開けると、夜來の雨は名残なく晴上つて、目前に聳立つ地藏山の頂上近き東面は、折柄旭光を浴びて金色に洗ひ出されて居る。赤城山へ登つての最初の朝の爽快さに、云ひ知れぬ愉快を兩頬に浮べて湖畔に飛び出した。

赤城外輪山の主峯黒檜山は澁面を作つて黒い物々しい山姿を湖面に寫し出し、朝の静寂に加へて沈痛な偉容に、自ら眞面目な心の緊張を感じさせた。

地藏の頂は旭光に焼き爛されん許りに強烈な黄金色を反映して居る、七月の早天の碧空を寫し尙ほ周圍の樹葉の暗緑を吸つた波

静かに湖面はあく迄壯重な色彩を放つて居る。

小鳥が島に近く一つ湖面に波紋が浮び出た、必然クキが跳ねたんだらう、小輪は次第々と大輪を書いて静に波紋がおし擴まる、静寂な眺めだ。

晴の日を喜ぶ小鳥のヒンカラくと山々に其の澄んだ朗らかな響りが響き渡る、私は湖水ベリを黒檜山の方に向つて歩き出した。

是より右黒檜登山路とある邊りの熊笹茂る中につと紅の一點を見出す、木花咲耶姫の簪の花とさへ唱はれてる可憐な車百合の一輪が朝露重げに咲さうな垂れて居る、そつと手折つて宿に歸り空瓶に刺して置いた。……………

窓越しに見やると前の草地に五六頭の放牛が白樺の茂味の中から、のそりと現はれる、「もー」と牛が一聲唸つて山の空気を恐ろしく震動させた。流石五千尺の高地は日に高く昇るも、この眞夏ながら誠に冷涼て身を日向に置いても猶小春日和の温味を覺えるに過ぎない。

午過ぎ宿舎の裏手に聳立つ地藏山に登つて見る、下駄の緒が小岩に躓く度に緩んで歩き辛い、今さら草鞋掛けて出直す程のことでも無く、やがて頂上に攀りつく、大沼、小沼、血の池が湖の鏡の様に眼下に擴がる。遠く霧の晴れ間に不二山が薄墨の畫を見る様に淡く姿を見せる、其外の山々は綿の如く重なり合つて亂雲に包まれて

唯北方は武尊山のそれらしきを認めただのみであつた。眺望の不結果を恨む程の事もなく、夕日の沈む頃湖畔の宿舎に歸つた。丁度十人程女連の登山者が宿の入口に今着いたと云ふ處で、二階に上ると自分の貸りた室を隣室に移して呉れとの主人の嘆願に二階の端の室から中央の室に移つた。

可成運動した後の食欲に御馳走の少ないことをこぼす餘裕もなく、五椀を安々平げて尙物足りない氣がした。

暗やみを破つて『河井!』とたゞならぬ人呼ぶ聲がフイと起る。續けさまに又『河井!』と呼ぶ。

『どう爲たんでせう?』と隣室に居る人に訊ねる。

『ナニ先き鳥居峠の方に出掛けた人が未だ歸らないのに大分霧が捲いて来る様子だから、呼んで見て居るんです』

と、安からぬ返事があつた。其中二三人提灯を點けて探しに出て行く、昨日山の人となつて同宿の人と面識の淺い、話し相手の無い私しは室に燈されたランプの灯影を見守りながら、また戶外で『河井!』と呼ぶ聲をなんとはなしに氣にする。

『オ、イ……』と小沼の邊に反響がある様だ。

先程明た隣室では夕方宿に着いた女連が食事も済んだと見えて天狗俳諧がはじまる、旅の樂しき夜の團欒といつた調子に盛に哄笑が湧く。なんでも△△△の連中だと先程主人が話して居た。其中先刻

探しに出掛けた連中も歸つて來た様子、眞中の室に移轉させられた
獨の旅人は讀書にも倦いて眠る。

◎

六時過ぎ起床する。障子を開けると、霧が深い夫ても地藏の頂
は旭光に明るく洗ひ出されて居る、見る間にそれも霧に包まれ
て、朝食を終る頃は全然霧が捲いて、時々呪ふ様に吹き流れて室内
に迷ひ込んで來る。雨も其内交じつて一日暗い日で、小鳥の囀りも
聞えなかつた。

隣室の女連は色々隠し藝を演じ出して、籠居の鬱を晴して居る、
そして時々ドツと感興の乗つた哄笑が起る。

午食時分に漸つと荷物が前橋から氷り運びの馬の背に托されて到
着する、蜜柑箱に張り板を渡した机代りの上に書物を併べたりし
て、じめじめ爲た暗い日を送つた。

五時頃四五人の登山者が雨にズブ濡れと爲つて到着するのを見
た。

『オーイ』と雨に一層薄暗くなつた地藏山の方で道問ふ聲が如何に
も物淋しく聞える。宿からも探しに二三人出て行く、其中ビシヨ濡
れとなつた旅人が二三人又宿に着いた。

『オーイ』と叫ぶ聲は、今更自分が人里離れた六千尺の山上に居住
する氣持ちを明瞭に意識させる。

「オーイ」と云ふ叫びは時々牛の唸き聲と紛れて折角探しに出てとんだ莫迦を見る事があると云つた様な會話が、さつき隣り室に泊り込んだ客人と宿のTさんとの間に換される。夕食過ぎてN君が先程到着された事を知つて知己を得た事に心嬉しく面會する。

N君は目鏡を掛けた、柔しい面立ちの姿のスラリとした人だ。

「赤城山は低山と云つて道に困難は無い様ですが、何にしる牛や馬の歩るく細道が滅茶苦茶に印いて居るので、霧の深い時はツイ路を取り違へて魔誤付くことが有りますよ。今日なんか麓は晴れて居たんですが、山に來ると、こんな暴れなんてすから、拙手をする野宿でも爲る様な事になります」と山登りはあく迄用意が肝要なりと

云つた面付をされる。

窓外に暴れ募る風雨の叫びを耳にしながら、

「もつとも」と諾く。

「實際此家のお婆さんさへ霧の爲めツイ路を誤つて地藏山へ登つて了つたと云ふ失策談が有るんですからねえ」と一層濃霧暴風雨の時は、山道の危険で油断のならぬ事を確證される。ザーと一吹き風雨が雨戸を激しく襲ふ。戸外は一刻々と激雨暴風が増々強靱となつて、黒雲の右に飛び左に翔り、山々を舐め木立を叩く、自然の猛威の激しさを想像すれば自づと、身を畏縮する様な氣持となる。

早く臥床に入つて明日の晴を期待して眠る。

○
 パリ／＼／＼、ヒュツと雨戸を猛烈に打つ音に目がフト覺める。
 ポンポンと階下で二時が鳴る。ハツとして耳を濟すと、風雨は暴れ
 に暴れて居る、一頻雨戸がガタガタと揺れる。グラグラと家が震動
 して轉倒するのかとハラハラする。

雨は大粒らしい、霞でも降る様にバラ／＼と雨戸に衝突かる。廊
 下に灯された、ランプが時々風に煽られて消えさうになる。目覺め
 たのは自分一人では無いと見えて、

「マア大變な暴れてすのネー」と隣室で力ない女の聲がする。然し
 又何時の間にか眠つてしまつた。

起き出たのは八時過ぎ、湖畔に出て見る、晴たが未だ昨夜の名残の
 風が恐しく吹いて、湖面は凄まじい波頭を擡げ、夫れが白く碎かれ
 ては散滴を飛して居る。それでも午頃から全然穩和な晴れやかな天
 氣となつた。

洋服に身を固めて黒檜山の登山を試みた。昨夜の雨で常は浅い大
 沼に灑ぐ小流も今日は脛程もあつて、折角の新しい草鞋も水浸しに
 なつてしまつた。

湖畔に添ふて白樺、楓、檜の茂り合つた森林帯を通り、下草の熊
 笹を左右に靡かせ、漸く草路に出た。カラリと四方が展開する、下
 方に大沼が今朝の怒つた姿も無く、明鏡の様に收まり返つて、一つ

の波瀾も無く小鳥が島が曲玉の様な形をして浮んで見える。
相變らず湖を圍む外輪山が翠綠滴る許りの姿を水鏡に影宿して居る。

地藏山の左肩大沼より餘程高位置に小沼がこれも圓鏡の様に日光に湖面が照されて、白く輝いて見える。おいだるみ邊へ來ると一寸呼吸が跳む、直前の山稜の側面の青草茂る處に、放牛が五六頭草を喰んで居た。アルプス地方の放牧の景趣も想像される、近付くと怪訴な面持をして皆此方を一勢に振り向いて、私の動靜を窺ふ様な眼付きて、危害でも加へられるかと云つた様子をして居る。處が此方は危害を加へる處ではない、餘程氣味が悪く却つて角でも振り立

てられぬ様にと、ビク／＼もので側を掬り抜けた。
四年前登つた時此邊に大變虫取スミレが生育して居た事を記憶してたが、今日は五六株チヨイ／＼と草影に認められたのみだつた。
頂上に漸く攀上る、石の小祠が三つ安置されてあつた。記念の爲め名刺を捧げる、再びこの名刺を見るかは疑問だ、誰に名を示す必要がある？ ナニ、矢張り人間の小さな誇りを示すんだ。
今日はフワリと碧空に白雲が流れて居る、下界も美事に晴れ上つて、上毛の平野はバノラマでも見る様に展開して、帯の様に長く山の狭間を抜け、或は沃野を流れる利根川もアリ／＼と眺められた。

正南の高い空に富士山が薄墨色に浮んで居る、富士山の足場の様に秩父の山々が一線を畫いて、其空線を西方へ佇ると白峯山がこれ薄墨色に浮び出て居る。

八つ嶽のそれらしい姿も見えた、榛名山は眼下に縮曲の多様な山巔を擡げて居る、正面の方は雲が封じてゐて、眺めたい北信の山は、少しも見定める事が出来なかつた。

振り返つて正北の方を望むと、燧岳が二つの鋭い牙の様な峯を劃然と碧空に突き立て、居る、立派な山容だ。武尊山は一つ一つの縮曲を數へ得る程眞近に、肩巾の廣い峯を聳て居る。

マアこれ丈けの眺望を得たのは登り甲斐があつた。

尙進んで三角標のある峯に来る、三角臺は破壊されて僅に二本の古杭が白骨の様に風雨に晒されて、棒立ちと爲つて残つて居る、標石には三等三角標を名記してあつた、尙峯づたひに進むと奥の院とも云ふ可き峯に到達した、岩陰に小祠が安置されてある。これから先は灌木が亂立して兎ても進め相てない、ズツと傾斜をして兎に角小黒檜山に續くわけだ。

再び黒檜山巔に引き返して、心行く許り宏然の氣を養つた。

日光方面の山岳は恰も夕陽に洗ひ出されて、紫金色を呈して居る山の光榮のその如くに。永久この宏壯な景趣に見惚れて居たに、然し一刻一刻と暗の大手は容赦なく迫つて来る、森林帯の暗を思ふ

と急に下山し度くなつて、飛ぶ様に馳せて湖畔に立ち戻つた。
汗ばんだ體を湖水に浸して清浴を爲る、夕食も美味に終つて六疊の室に寝そべつて見る。隣室では相變らず賑かな笑聲が花やかに起るのて湖畔に出て見る。

星あかりに見渡すと周圍の外輪山が黒々と静まり返つて幽寂な物物しい姿を湖面に寫して居る、暗中にピカツ／＼と青い光りが、一つ、二つさては多数目に付く。螢だ。大變な數だ、見詰めれば見詰むる程ピカリピカリ湖上に光る。美しい湖上の小イルミネーション、静寂あく迄静寂。

宿に歸れば隣室は相變らず陽氣で、賑かな笑聲！仲て一番大竹さ

んと云ふ人がもてると見えて『大竹さん、大竹さん』の呼名が盛に出る。其都度『なアに？』と若々しい威勢の宜い返事をする、さて大竹さんとは如何な方か？

◎

安き眠りの醒めたのは六時頃、今朝は旭日麗に輝き、世の榮えを讚嘆する小鳥の高鳴さもいと閑に、山々に響き渡る。

朝食後携帶して來た『ワルデン』を懐にして、湖畔の青草茂る高原の白樺の木蔭に身を横へて見る。溫和な日光が梢を洩れて柔かく顔に射し出す、隣りの梢から駒鳥がヒンカラと囀りはじめる。

五輪峠から薬師岳の外輪山の草山は青い毛氈の築山の様に鼻先さ

に見える、小波一つ立たぬ大沼は庭園の池にも見る様な氣になる。
うたゝ寝の草枕夢は何地を逍遙ふか？

午食頃、地藏山に黒雲漲り、時折りゴロゴロと遠雷鳴りの音も響き、雨も交じつて一時時雨れた。

しめやかに時雨して窓前の白樺の立ち樹を朧に包む、葉面に滴る時雨の音は柔しき歌である。夕暮には再び晴れ上つた、食後湖畔の辨天社の石垣に腰を下して、暮れて行く夕霧に包まれて見る、一枚一枚と薄い黒いベールの幕が湖上に垂れ下つて、やかては暗の大手に一面に包まれてしまつた。

隣室の連中がドヤドヤと辨天社の石垣に表はれた。

「大竹さん一つお吟いなさいな」と群の仲から責め立てた一人の女は水際に直立した。

「、、、の秋更けて陣雲暗し五丈原……………」

相函病あつかりき……………」
と、静寂な湖に氣持ちよく玉の様な聲が響き渡つた、或は高調或は悲調に朗吟は進んで行く、暫時は一同聲もなく謹聽する。

「お上手ネー」と讚美の聲が湧き立つた。

雨がポツリポツリと降りはじめたので一同は引上げた。

◎
同宿のK君と顔馴染となつて、二人で午前中湖畔を周遊した。

『二階の女連は出發した様ですネー』とK君が話し出す。

『今朝早く出發しましたよ』

『なんだか嵐が過ぎ去つた後の様な気がしますネー』

『なにしろ十二三人の若い連中ですもの』

『ハ、ハ、ハ、ハ、』

二人は辨天社の邊から沼尻の方へ湖畔を逍遙した。

沼尻から地藏山を仰ぐと、黄味かゝつた緑の柔かな色彩に包まれ

て、其の丸味を帯びた山容がいかにも豊圓に温味な感じを起させる。

黒檜山が赤城諸峯の大王なら、地藏山は女王とも云いたい。美しい。

い湖をさし挟んで屹立する二山を仰ぐと、天地悠久の感が胸に迫る。

『“Faw thousands years go by one minute”』とK君が囁やいた。

沼尾川(大沼の落ち口)には一本の丸木橋が渡してあつた。白樺の

葉摺の音を耳にしながら或は岩清水を涉り、花を摘み一時間ならず

して、駒ヶ嶽の裾野に出た。

牛馬の一群が湖畔に遊んで居る、一疋の仔馬を手馴けて頬を擦つ

てやる。若草を採つて口にあてがうと、仔馬はゴロリと四つ脚をふ

ん張つて寝そべる、可愛ものだ、然しうっかり體を擦るうものな

ら、汗油と細土で手裏は眞黒になつてしまふ。

午から宿のTさんに荷物を運んで貰つて、再び最初の片隅の室に
轉居つた。今日は家中が大變静かな氣がする、窓を開けると地藏山
に薄すり霧が懸つて、今迄の澄んだ碧空の一片すらも窺へなんだ。
然し今日は如何にも眞夏らしい氣分がする。

湖畔に出かけて小舟を操つた、周囲の外輪山の美しい影を楫で亂
すのが惜しい様だ。

其中霧が一ぱい湖面に立ち籠めて物凄く暗澹となる、早々宿に
引き上げた。



檐端を打つ点滴に目醒める、今朝一面濃霧に包まれて、剩へ雨も

交じつて居る。

物淋しい日にボンヤリして居ると、障子が開いた。

「ご免なさいまし」と宿のTさんが笑顔を見せた。

「あのネー何んてしたつけオホ、、、」と物も充分言はぬ先さか
ら笑ひ崩れる。

「何んてすか？」と訝かると、

「祭文てお存じ……アノ講釋師、デロレンさんですよ」と一層笑ひ
崩れる。

「今階下へそのデロレンさんが夫婦で來ましたの、それで皆さんが
お宜しければ今夜家に泊め様つてネ、兎に角皆さんにお訪ねに上つ

たのです……マア大變なお役目なんですよ」と元氣な聲だ。
 『デロレンさん……私しは構ひません』
 『どうもお邪魔をしました』と障子を閉めてトントント階下へ足を運ぶ。

一日霧が深い、地藏山から吹き下す霧が煙の様に室内に舞ひ流れ込む。白樺のざわめく音が霧の奥に淋しく響く、暗い陰氣な日だ。入浴しながら窓越しに赤城神社の森を望んだが十間と離れない其森すら霧の爲め明瞭でない。

『オーイ』と道問ふ聲が霧の奥にする。
 自然の威暴に可弱い人間がもう手も足も出ない、力盡きた、絶望

の哀號！なんと云ふ物淋しい響きだろう。
 スウと霧が一揺れすると、ボンやり洋服を着た人影が幻影の様に霧の中に浮び出る。
 後で聞けば、鳥居峠を降りてからツイ宿の近く迄来て、霧の爲め方向を失して、三時間も迂路付き廻つたと。
 夕食後愈々デロレン左衛門の始まりて、隣室のN君の連中と、前室の美術家連と階下の爐邊に各自座を占める。M詩人夫妻も出陣になる。爐の焚火の紫色の煙りは、淡く渦巻をして、眞黒に燻された、黒光りする天井に舞ひ昇る。やがてデロレン左衛門君が講釋を始めた。

デロレン左衛門君は五十代の人で、柄の大きい顔には苦勞の波の幾筋かゝ刻まれて居る。前に小机を置いて、左側に之も四五十代の小さい丸鬚を頭に乗せた妻君を控へさせ、二人とも右手に眞鍮の輪金着きの小さな錫杖の先きの様な物を持ち、チンチンと打ち振り打ち振り調子を取る。左手には小さな螺貝を持ち時に之れを吹奏して、デロレン、デロレンと遣り出す。なんでも上州長脇差國定忠次の一席であつた。聴衆は時にデロレン君を見やり時に爐の焚火を見詰める。講釋は愈々佳境に進んで行く。夜も更けて行く。

……
 暗い戸口の方で何んだか家の人々が立ち騒ぐ、一人が注目し二人

となり、そして聴衆の一同は新しい事件に心を轉じた。
 『何事があつたんですか』と誰れともなしに問ひを發した。
 事は此家の下男で袈裟公と云ふ爺が今日午頃三ノ輪迄て用達しに出かけたのが、今だに歸宅せぬと云ふので有つた。
 二里にも足らぬ途を斯う晩くなる處を想像すると、今朝から霧の深いために或は山道に迷ひ込んで困難を爲て居るのではないかと云ふ不安が家内の人々の胸に起つた。
 戸外は雨が盛に降つて風さへ加はつて、險惡な天候となつて居る。霧が時折り戸の隙間から呪ふ様に室内に流れ込む。最早デロレン處では無くなつた。

爐邊の聴衆も好奇と不安の面持ちとなつて袈裟公に話題が持ち上る。

袈裟公は既に五十代を過ぎ夫に少し抜けて居る男だ。夫だけ一層案じられる次第なのだ。

「三の輪まで容子見に出かけるんだネー」と分別あり實な五十代の土地の人らしいお客の一人が解決の發言をした。

「兎角三の輪に出かけ給へ」と若い連中も同意した。

其處で宿所の若い男が二人かれこれ用意を備へて、暗い雨の山路を三の輪迄搜索に出掛けた。……………

一同は解散した、室に歸つて寢支度をして居ると宿のNさんがラ

ンプを下げに入つて來た。Nさんは憂慮した面持ちで、霧の深い時よく道慣れた山の者でも不慮の失策を仕出かすと云つた様な實例をしめやかに物語つた。

今夜位しみじみ山家の寂寥を味つた日はなかつた。



袈裟公が地藏山の麓に倒れて居るので大騒動と爲つて、愈々悲惨な出來事と爲る……………目醒めて見ると凡て夫は夢であつた。

起き上つて洗面に階下に行くと、湯殿でNさんが働いて居た。何時も袈裟公の働く處だ。

「お早う」と挨拶をする。

「昨夜の連中は如何しました」と聞いて見る。

「搜索に出た二人は歸つて來ましたが、袈裟さんは三の輪に行かなかつたさうです」と沈んだ聲だ。

流し場の何日も賑かなのが、今朝ばかりは火の消えた様だ。皆袈裟公を案じて居るらしい。

霧は渦巻きをして、時折音もなく障子の隙間から室内に忍び込む。霧靄の奥に白樺のざわめく音、今日も亦淋しい暗い日だ。

友人に通信のため、切手を求めに階下に降りてTさんに其を貰ひながら。

「袈裟さんは未だ歸らぬさうですネー」と聞くと、



「エ、如何したんですか……、アノ爺さんは人に氣を揉まさせますヨ」と何日も快活な調子の人が妙に沈んで居る。

雨は益々降る、今日は一層風が強くなり吹き暴れる。フト障子を開けて赤城神社の方を眺めやると箕笠を着た男がよたく霧と雨の中を此方に歩いて来る、面立は不明瞭だが袈裟公らしい、夫とも今朝探しに出掛けた連中の一人が歸つて来たのかと思つて見る。

「袈裟公ヤイ」と階下で大聲が起つた。

「如何したんだい、袈裟公」と急に階下は騒しく賑になつた。

自分も下に行つて見ると、袈裟公先生悠然と爐端に腰を下して、ニヤリ／＼して居る。なんでも鈴ヶ峯の方へ迷ひ込んで夕邊は炭焼



小舎に一泊して、今朝夫でも早く三の輪に用達しをして今歸つて來たとの事だ。なにしろ無事であつた事で、階下は急に再び火が燃え上つて、賑かになつた。

夜は又又爐端でデロレンが始り、一寸聽きに下りて行く、M詩人も既に着席して居た。

「サー此處へ」と爐端の一隅を開けて呉れる。今夜は夫程の感興をデロレンから得る事が出来なんだ。眠くなつて室に戻つた、デロレンの高調子のあたりを洩れ聞きながら、何時からとなくうとくする。

待ち焦れた日光が地蔵の半腹を金色に染める。而し充分の晴とは云はれない、山の巔には尙霧が胡亂臭くうろついて居る。

一寸同室したK君は明日下山との事で、荷物を階下に持ち出して、氷運搬の馬の背に托す事を頼んで居た。

湖畔に出て見る、二三日雨にくすんで居た身には今更近傍の山のたゞずまひ、青葉の色が目新しく感じられた。宿のUさんが湖畔に遊びに來た、なんでも山椒の魚を湖の水際で捕ると云ふので、水際を探してゐた。

小さな居守の形をした奴が清澄な水を透してひきづり廻るのが視える冷たい清水の流れ込む邊には殊に澤山居た。

午過ぎ隣室のI君と連だつて、血の池の方へ遊びに出かけた。血の池は妙に赤黒いよどんだ水が停滞つて居た。小沼に出て長七郎岳に登つた。小沼の落口は赤裸々に岩が露出して居て物凄く宏壯な景色である。落口には俵を填充して、關止めとなつて居る、早魃の時山麓にある水田の用水に小沼の水が利用せられて居るのだと、I君が教へて呉れた。小沼の落口近くから長七郎岳に登つて、峯を縦先して鳥居峠へ抜ける積りが、二つ程峯頭を攀じ進んだあたりで、濃霧が襲來して遂に豫定を遂行せず、再び小沼に立ち戻つて宿に歸つた。

袈裟公の一件が妙に自分等を憶病者にさせてしまつた。

曇りながらも時折り日の光りを見る。

K君は今朝下山するとの事で、新坂下の硫黄採掘所迄見送る。新坂平は仲々宏大な高原で檜の大木が粗に繁つて、晴れ霧の浅い今日は見透しの広い場所だが霧の深い時はツイ牛馬の蹂躪した細路に踏み迷つてあらぬ方に迷ひ込み場所である。

袈裟公の物語りによるも迷路への出發點は此處ら邊りて、ツイ新坂途を鈴ヶ峯へと踏み迷つたらしい。

午から宿の健ちやんと、地藏山の麓に白樺の皮剝に出かけた。健ちやんは腕白盛りの少年で、白樺の大木に攀ぢ登つては眞白な表皮

をメリメリ剥いて呉れた。

夕方B君と云ふ何年前かの記憶を辿つて想ひ出される友が登山して来た。

◎

明るく障子に旭の射し輝くので目醒める。朝食して十一番の湖に面した室に轉居した。此室は疊も新しく、障子を開けると駒、黒檜、五輪一帶の外輪山が一望に眺められ、白樺の葉越しに大沼の白い水の面も窺はれて、以前の九番室よりは甚だ居心地が善い。

十時頃雨沛然と降り湖面から黒檜山に掛けて、白く霧靄が立て込める、郭公がけたましく叫んで、湖の方面から駒ヶ岳の方向へ飛

び去る。浸々として戸外は暝闇の世界となつて行く、心迄引き込まれさうに、悲しい寂寞を感じた。

フトN君から、向ふ座敷で、

『牛乳豆腐が出来たから來給へ』と聲を掛けられる。夢を破られた様な氣になつて、N君の室に行つた。N君をはじめ若い連中が角火鉢を圍んで、背を丸くして居る。火鉢に掛つた土鍋がフツフツ片口から湯氣を白く立て、居た。なんでも今朝牧夫が搾つて來た牛乳に苦汁を加へて煮たとの事、一片味つて見たが脂肪分に富んで、一寸御馳走様とも云ひ兼ねる。N君は自身の發案丈に美味しい美味しいと平げて居た。

夕暮頃には霧が次第に濃厚になつて來た。
窓を開けて見ると、窓下を種牛が一頭ノソリノソリと歩いて居る。
百頭以上を妻とせる大王虎牛（毛並て斯く皆から名付られて居る）は
恬々と唸りながら威容嚴格に、白樺の立木の途へ頓て、姿を隠し
た。

◎

目覺めたのは六時頃、戸外は霧が徜徉つて居る。イヤにうす寒い
日だ。階下の爐端に暖まりに行く。宿の人が立ち働きの隙間々々に
爐の焚火を盛んにして呉れる。

M 詩人も爐端の一人となつた。宿の婆さんが一休みと爐端に腰を

据へる、焚木を爐に燻べながら小沼姫の物語りをして呉れた。

昔し昔し、赤城山下に赤堀の道玄と云つて、一人の大盡が住つて
居た。其家には一人の娘があつた。十六歳と云ふ花なら蕾の年頃で
ある。何の理由か、この赤城山の一湖小沼に身を投じた。これを知
つた村の人は、大盡の娘の行爲に驚嘆し、せめては死骸なりとも求
めたく、小沼の落口に關を開いた、處が驚怖くべし一頭の大蛇急焉
として波間に躍り上り、ハタと毒舌を振つて、人々を睨めた。人々
は意外の光景に腰を抜けんばかりに驚駭した。取るものも取りあへ
ずに山下に逃げ歸つた。

赤堀の人は湖神の怒りを鎮撫せんと、大勢登拜を試みたが、満足

に攀登し得た者は一人も無かつた。皆途中で、病や、故障のために失敗に歸した。

其後は赤堀の人々にしては赤城登拜は不可能の事となつた。たまさか登り得た者も赤堀の人たることを人に秘し單に赤城下の者と告げた。かくて以來赤城下は赤堀の異名と解釋されるに到つた。四月の赤城神社祭禮の日に赤城下の人は、赤飯の折り詰を湖心に向ひ投げて行くと。

斯した物語りに興を湧して、雑談は夫から夫れと花が咲いた。

又今から三十年も前の事だか、前橋町の或る女が結婚問題のいさくさの爲めに、山に逃げて來た。折りは三月で山は雪が深かつた。

小沼迄辿り着いたもの、湖面に厚い氷が塞して、身を湖水に投ずる譯にも行かぬ。徒らに身を疲労する、かくして落ちるとも無し湖畔の雪の上に倒れてしまつた。雪を喰つて二三日は露命を繼いだもの、其中手足の自由は無くなつて、夢の様に呼吸は通つて居た、斯うして二十日以上も経過して後人々の發見する處となつて、この宿に連れて來た。骨と皮といった慘な姿となつて居た。援からぬ命は其後どうやら恢復して、百日目で漸つと足が立つた。

『不思議な事も有るものだ』とお婆さんは回想的な面をしては話し續ける。

或は此山家にお婆さんが明治四年頃初めて來た頃は山犬、狐、狸

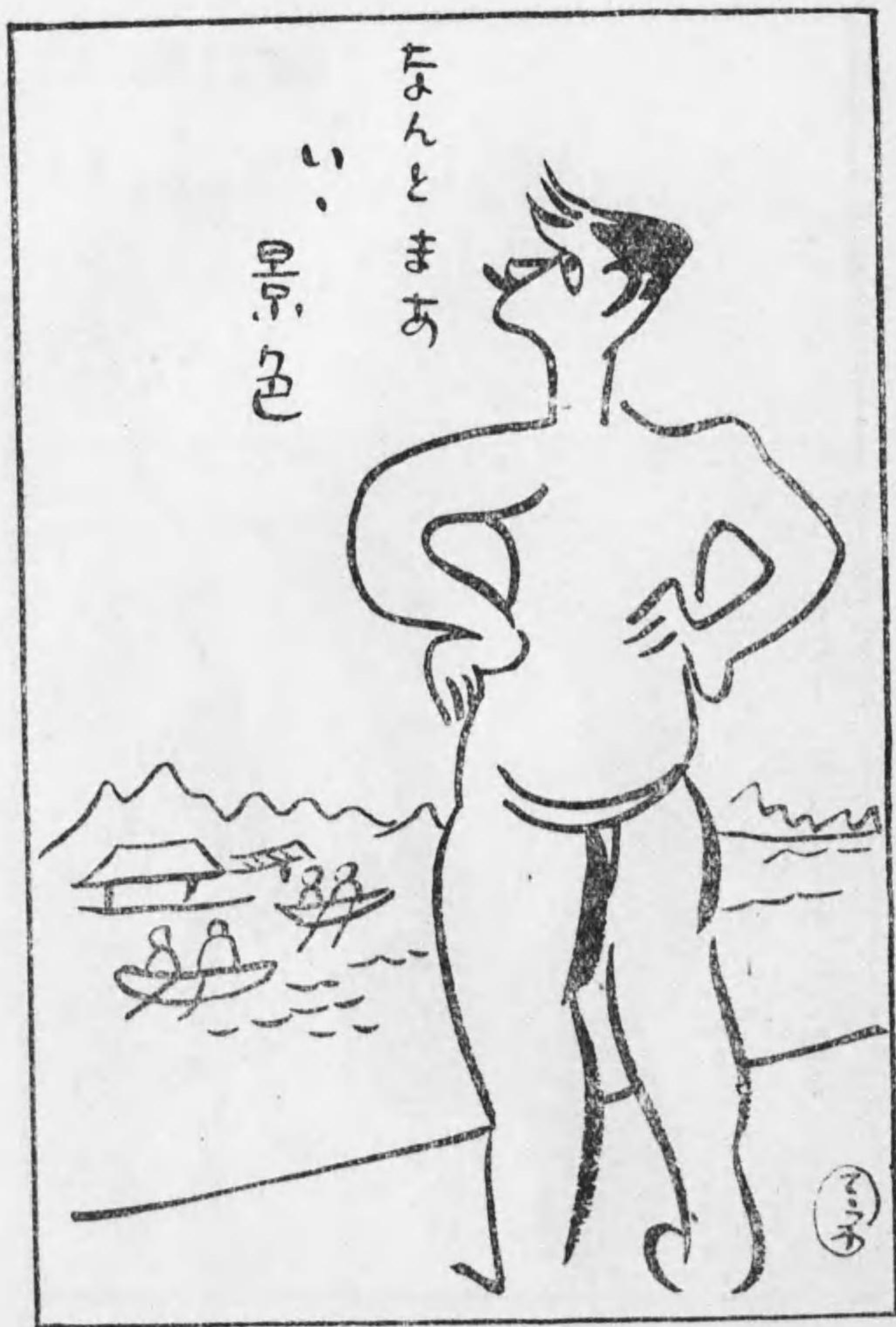
鹿等と同居と云ひたい程野獸の群れが居た當時の物凄さを語つて呉れた。

夜は二階の一室で、滞在連の顔馴染が集つて、指名點呼などに打ち興じて陰氣な一日を送る。夜の更けると共に猛烈に山は暴れ出した。家鳴り震動、木々の葉擦れの叫び、暴れの夜の物凄さ。

◎

昨夜山を揺つた暴風も、今朝はケロリと晴れて、黒檜山は久し振りに紫堇色の香ゆかしい山肌をして居る。

馬や牛が晴の目をさも喜ぶといった風に、前の廣場に澤山集つて、若草を喰ひ或はゴロリ横臥して日光浴をやつて居る。



鳥居峠から足尾方面の溪谷を眺めると、霧が渦巻をしては、鳥居峠の外輪山中の一缺刻面を目掛けて襲来し、展望を阻害するが、反

近には毛氈苔が夥しく生育して居る。

地蔵岳の圍んだ高原は、見るから廣々とした悠大な景趣で、小流の附

て、金色の笹縁を作り、夏雲の美しさを見せて居る。

姥古山の邊に一塊の入道雲がムクリと湧いて出る、光線を浴び

として泳ぎ廻つた。

午後湖上に船を二階の若い連中二三名と浮べて皆禪一つの裸體姿で、乗り込んだ。元氣の好い連中は、湖心あたりで、小舟を中心



つて勇壯な趣きがある。

小地藏岳に攀じた。此處にもムシトリスミレの生育するを見た。

山頂に達して、先日長七郎岳を縦走した日、この山嶺迄来たことを想ひ浮べた。小沼が眼下に望まれる、霧が少なからず彷徨ふのでツイと又見えなくなる。高い時間に荒山が無骨な肩を怒らかす、今日は遠望の叶はぬ日だった。降りには滅茶苦茶に小地藏を降つて、途中ヤナギ草の淡紫紅色に咲く花の穂を摘んで宿に歸つた。

入浴して美味に夕食を済した。窓を開けて見ると、爛々たる星の輝さが時々雲の切れ目に美しく光る。爐端へ下りて行くと、宿舎の入口の處で、Tさんが、

てすよ』

「矢つ張り山は空氣が新鮮だけ體に良いんでしよう」

「實際ですわ、ナンですかアノ都の塵埃つぼい空氣は嫌ですわ、てすけれど斯う湖畔位迄歩いて疲勞るなんて……」と元氣のまだ充分恢復せぬを恨む様な、淡い悲し味を感じた様な嘆き聲で、Tさんは

「ア、疲勞れた」と何處からか歸つて來た。

「如何したんです」と出會ひ頭に質問する。

「ナアに湖畔迄出て見たんですの、この六月病氣で都から山へ來て、斯うやつてブラ／＼爲ながら起きては居ますが、今日漸つと湖畔迄歩いて見たんです。デモ山へ來てから餘程體の調子が良いんですよ」

一寸面を戶外に向ける。

「アラ御覽なさい、お月様が出ました。サア一寸出て見ましよう」

「お待ちなさい今駒下駄を上げますから……」

「へエ……」とTさんが親切に入口の暗い隅から一足の下駄を探し出して呉れた。

二人で玄關前の廣場に出た。静然とTさんは月に面を向けて、黙想して居る。月光がTさんの白い面を牙々と照す。

「まア實際良ふ御座いますね。夕邊なんか家が轉倒かへる様に暴れたのに、今夜はあんな美しい月が出るなんて。……赤城山は氣が知れませんネ。ホ、ホ、ホ」と莞爾とする。

十二三夜の明月が牙えくと地藏山の頂に照りまざる。

「夏も山は良ふ御座います、冬は冬てそりや實際寂寞して吹雪の吹き暴む時などは又格別の趣きがあります。湖上は全然氷が張り詰めてネ……轉倒かへるにはもつて来いてす」

Tさんは頻とサモく赤城山の四季の趣を取りくく面白さを回想する様に月に見入つて、語り續ける。

「轉倒かへるてスケートですか」

「さうなんですの、マントを着ましてネスケート靴を履ひて、湖上に出ますと、北風がうまい具合に背中から吹きつけて呉れますと、體が『ツウ』と前進んですアツと思ふと後ざまに轉倒かへつてしま

います、面白いんですよ』とTさんは其數年前の幼かりし頃の思ひ出に耽る。

『こんな山に住めばですよ……もういゝ年をして泳ぎませんが、四年前迄は弟と二人でよく大沼で游泳しました……』

『ア、月が雲に影入つてしまいました』

『まあ嫌ですね、雲が全部月に懸つてしまいました。折角皆様がお出になつても、雨が降るとお氣の毒で、せめて十五夜迄の中一度は晴天にして、立派な月の光りを浮びたいものですねー』と思ひ入れ深く空を仰ぐ。静寂が暫し續く、お互に雲行の早い空を見上げて。黙想又瞑想といつた有様。

『全く静寂、幽静な夜だ』

『實際ですね、如何な人だつて考へたくなりますが。さア月も隠れたし。風も寒い様ですから家に歸りましょう』とTさんは爐端の方へ行く。

今日は水泳、登山とかなり運動し過ぎてがつかり疲勞して、深い眠りに就いた。



朝食後K君と五輪峠へ散策に出掛けた。

湖畔に添つて、黒檜山の麓を辿る、ヤマキテフが、美しい黄色の翅を日光に翩々と輝せて翹んで居た。

峠の頂上に辿り着くと、鬱蒼たる鈴ヶ峯の翠緑が、目前きに屹然と聳立つ、北裏の尾根續きに、二本楯の牧場は、勇大な裾野を形造つてズツと其裾先さが、雲中に隠れる。

黒檜山から、是れも尾根續きと成つて、小黒檜山が、かなり離れて、屹然として見える。

峠の青草の上に、身を横臥して、體の疲れを休める、二羽の熊鷹が、悠々と鼻前さの碧い空に飛翔して居る、駒ヶ岳の邊で「ボーボー」と牧夫の牛馬を呼び集める聲がする、(牧馬牧牛に一日一回二回、鹽分を與へるため斯くは牧夫が叫ぶのである) 光線は秋の強さで、心地良き温味を背に投げて呉れた。山降る道々姫百合の朱丹の

花蕾を採集して宿に歸つた。

夕暮る頃湖畔に出て、小舟を操る、今迄晴れた碧空が次第に薄れて、鳥居峠方面から一陣の霧が甜める様にして湖上に押し擴まる、夕日は爲めに光りを増して、金色の小輪を畫き、西の山影鉦ヶ峯の彼方へ、次第に沈んで行く。愈々薄暗くなる。夕立が「ザアツ」と一降り訪ひ注ぐ、雨滴の波紋が、湖上に幾回となく畫かれ、はては波紋は互に擴まつて、湖水面は水流とも見る可き、白色部と、黒色部に別れた。宿に歸ると、恰も伊勢勢町方面から、小學生徒が二三十人程、老先生に引卒されて着いて居た。夜は此等の御仲間入りとなつて各自が錢廻し、指名點呼、ゴロゴロ遊びの罰則に騒ぎ出す隠し

藝に打興じた。老先生は「下某と云はれた。見るから徒な虚榮と云つた嫌味は毛程も無く、樂し氣に一同と打ち興じて喜んで居る。今回が六十一回目の赤城登山で、尙百回迄は、毎年登山する決心だとの事、老先生は赤城登山に依つて、一つの信念を得たと、眞底赤城山が好きな一人なのだ、先生の赤城登山の決書を朗讀された時、私は此老先生を仁者なるかなと思つた。よし其決書中に「あへて余は仁者を氣取るては無いが……」云々として、謙遜の辭を述べられたにしても、私し丈は先生が仁者を氣取る人とは信じない。かれこれ騒いで眠床に入つたのは十一時を過ぎて居た。

フト目醒めると、N君の室で「晴れてます、天氣は大丈夫！カシオペアが光つてます！」とI君の聲がする。ゴト／＼何處へか、出掛ける用意の音がする、ボンボンと階下の柱時計が四時を報ずる。此の早朝妙なので、寢床から「何處へ出掛けるんです」と聽いて見る。

『日の出を見に鳥居峠の方へ行かふと思つて……私は未だ赤城山からの日の出の光景を眺めた事が無いので、目覺めたを幸ひに、N君等一行に加はつて、微明い星明りに、路を辿つて、鳥居峠に向つた。』

静まり返つた早朝の地藏、黒檜、駒岳等は未だ眠りの中にある、

そして其暗紫色の山肌が云ひ難い神秘な光りを放つ、草叢に夜を明
す一群の牛を驚したり、闇味に足を踏み違へて、いやと脚躁の邊り
をしたゝか下駄で打つたりして、鳥居峠に辿り着いた。

見る限り白雲が下界を封じ込めて、淡く足尾、日光の諸連嶺が灰
色に夫も見工台では、山か雲か疑問になる。ヒヤリ寒い微風が面を
掠め去る、斯して岩に腰を下して日の出を待ち構へた。

漸々東の方が微白く明るむ、其中一帯の朱紅が中天にクツキリ筋
を着けると駒ヶ岳山上遠くに浮ぶ片雲が、俄に朱爛色に輝く。今こ
そ日の出らしいが、邪魔雲がのさばつて、朱盆は見られなんだ。反
映は地藏山の頂を金色に染めて、次等に四方は明らか、昔の淡

い瞬きも頓て見えなくなつた。……………

朝食を宿に歸つて済す、珍らしく早先きをしたので一日が大變永
く感じられる。

夕食頃前橋路から〇君兄弟が登山して来る。山も近頃はかなり繁
盛する。……………

月光が白樺の幹を青白く照して居る。待ち焦れたこの光り、直に
I 君K君と共に湖上に小舟を浮べる。

十三四日の月が地藏の山頂に輝いて湖水に月影を宿す、櫂を操る
度に月影は碎けて、金波銀波を跳らす、外輪山の山々は、静り返つ
て黒い影を湖上に投げ寫して、寂漠として音もない、時々鳥居峠方

面から薄絹の様に、霧がフワリと、月光を遮つて、湖上に涉つて來る。

水精が今宵こそ、小鳥ヶ島邊に出現して必と月を見入つて居る事だらう。……………

一同小舟を獨り湖上に漂はして、各自勝手な空想に耽ける。誰かグローレライを歌ふ。一同はこれに合して低唱した。



障子の明かるさにヒヨイト、飛び起きて、戸外を窺へば、黒檜の頂、蒼碧に澄みに澄んで居る。其の澄み切つた、コバルト色は實際、秋碧、天高しと云ひたい程だ。『地藏山へ此んな時躋つたら』と

心に浮ぶと、一刻の猶豫が惜まれる、下駄つき掛けて、走る様にして地藏山の頂に攀じた。豫想は當つた。下界遙に僅か白雲が搖籃するのみで、遠く近く諸々の山岳は自分を中心として、一大圓を畫いて雲表に表はれて居る。絶叫したい程立派な眺望だ。

遠く信飛北日本アルプス諸山の残雪を印した山容迄見える。正南に不二山が残雪の三角形なのを中腹當りに印し付け、桔梗色の山肌をして聳立つ。續いて甲斐白峯、甲斐駒ヶ岳、淺間山、遠く信飛北アルプスの諸連嶺、近く正北に武尊山、笠ヶ岳、燈ヶ岳、黒檜山の肩越しに高原山と凡そ赤城山から望まれる、山と云ふ山を眺められるので、暫くは眺望の爲め眼を北に西にと忙しくさせる。其の

中N君も登つて來られる。携帶された望遠鏡を借りて見れば、一層明瞭に山容の偉大に接する事が出来た。
八つ岳の硫黄岳の爆裂口のアの赤爛れた邊り等が一層明瞭に窺はれる。

「偉觀ですな」

「立派ですな」

「アノ雪のある四阿山の右肩に見える山は何山でしょう」

「鹿島槍でしょうか」

「ア、見給へ、鹿島槍らしい山の右を！雪の眞白く、大變残つた、山頂が見えますよ」



一寸 ニつして

紙に

さすめて

(280)

「ア、見えました」
「白馬らしいですネ」
.....
「良いなー！偉観！偉観！」
二人はこの壯美に暫し忙然として佇む。
「残念〜鉛筆も、紙も持つて来なかつた」
「紙ですか、待ち給へ」とN君は袖を探る。
「ありました、此んな紙が」とレターペーパーを一枚呉れる。鉛筆も借りて、腰を岩根に下して、此の宏大な眺めをスケッチして見る。



鉛筆持つ手が、うす寒く、凋つた様になる。冷りく微風が、面を掠める。

N君は着莫塵を、赤沼風露草の咲き亂れた赤い花叢の傍に敷いて、詩集を點讀される。

お互に静り返つた瞬間は霧の一片が、微妙な樂音を立て、面を掠めて去る。……………

……………
Nさんと別れた私は、宿に歸つて十時頃朝食を終つた。

夕方湖上に獨小舟を浮べて漕いで遊ぶ、十四五夜の明月が、鳥居峠の上に昇る。感興に乗じて『ローレライ』を口吟すれば静寂な山上

の空氣は少なからず震動させ、聲の餘韻が山々に響き渉る。

○君連追貝方面と出發されるので、五輪峠迄晴を幸ひ見送つて行く。

五輪峠の放牧場の柵の處で、別れを告げる。

『では左様なら』

『日光へ出たら端書を下さる』

『エ、途中の御通報は必然と致します』

『では左様なら……………』

○君一行は根利路へ向つて峠を下りて行く、私は是から獨り五輪

から峯つゞきの草山を、薬師岳、陣笠山と逍遙して、出張山の峯端
れ迄出た。此處から鈴ヶ峯を眺めると其裾が、沼尾川の溪谷に望ん
て、岩石の重疊した山肌は、赤城山の一峯として、其趣を異にし
て、壯快である。殊に靜に沼尾川の奔流の叫びを聴くので、如何に
幽寂な思ひをさせる事だろう。傍らに咲き誇るレンゲシヨウマの
紫花を思ふ様摘んで君へ御土産とする。此地點から沼尻へ目懸け
て、草山を迂る様にして下つて、湖畔づたひに宿に歸つた。

午食後再びC君と所定めず、花を集めに歩いた。

C君の採集胴籠中には、

ヤマオダマキ、

シロバナヘイビチゴ、

ツバメオモト

等が集められて有る。
夕暮に一洋人と二洋婦人が伊香保の方から登つて来て、大洞の宿
に着いた、夫が甚だ珍しい新しい出来事の様だに思はれた。
この一行は宿に着くと、皆白衣の薄衣をまといつて湖畔に出て行つ
た。

翠緑の影深い湖に白衣姿のブロード。それは白樺の木影から眺め
て居るのは美しかつた。

然も皓々たる十六夜の明月が鳥居峠に照り出し、時に霧が薄すり

其朱玉を包む、下界で見る様な不明瞭さが無いだけ一層美しい。
薬師岳の方面は霧の爲め薄衣を着せられ、駒ヶ岳に照る月光は爲めに虹を現出した。

月の虹！朧な七色が、湖上に橋を涉し橋は湖上にシンメトリーな影を寫して、又ない眺めてあつた。

白衣のブロンドも何時しか宿に引き上げて、湖畔には人影も見えずなつた。月光は牙えくと天空に輝いて居る。

◎

美しき晴れに、早朝湖畔に出て、小舟を操らんと、辨天社の岩影にある、小舟を引き出して居ると、昨夜のブロンドの一人が、白樺

の木影からあらわれた。

「舟を浮べるなら乗せて下せよ」

「えゝ……」と一もない承諾する。

私は艫に腰下して、櫂を操る。軽装したブロンドは中央に座して、舟べりから、湖面に寫る美しい自分の姿を眺めたり、或は外輪山の、翠緑滴るばかりの光景に見惚れて居る。

「あの山ですね……私したちは月見に夕邊登りましたよ」と地藏岳を仰いで、思ひ出深い笑みを片頬に浮べて、胸を舟縁から張り出してじつと、山容を見入りながら、巧な日本語を使ふ。

私は赤城の湖上でこんな洋畫じみた湖上の舟人を氣取らうとは

夢にも思はなかつた。そして寧ろこんな様子を湖畔から眺めて見たいと思つた。

日が登るにつれて、甚だ蒸し暑い。

午後黒邊の方向で雷鳴がする、雷鳴りは山々に反響を起して、轟轟と響き渡る。少し夕立があつた。

夕方湖畔に出れば、出張山から薬師岳に掛けて亂雲がむくむくと浮き上つた、折柄夕日の餘光を一ぱいに受けて金色、赤爛色に輝く尚餘光は空を燃ゆる様な赤橙色に染めて居る。

これ程美しい夕榮の美景はこれがはじめてであつた。宿に歸るとN君が、

「錢廻しをして遊びますから僕の室へ來給へ」と障子越しに誘はれる。

「エ、有難ふ、今行きますよ」と日記をいそいで記載めて自分も仲間入りをする。

二階の連中にはあまり一夜泊りの客を宿泊させぬ丈けT君をはじめめ！、K君等なり、面なじみの連中もお互に遠慮がなくなつて居る。

宿のTさんをはじめ大勢も打ち交つて、この世離れした山上の一軒家に楽しい無邪氣な室内遊戯をして夜を更した。

然し今夜は自分には眞底打ち興じられなかつた。TさんはTさ

んで、いつも見て居るとき程感興の真から乗つた面持ちをして居ない。

かれこれ夜は十一時頃になつた。

障子の隙間に月光が青味を帯びて見えるので、席を離れて湖畔に行つて見る。

小舟を獨り操つて寒い淋しい月を眺めた。

今夜こそ空は晴れきつて、青白い月光が物凄い程山、林、湖面、

小舟、そして自分を神秘的な色彩に包んで居る。斯うした夜更けの湖上に舟を浮べて見れば、又々人間離なれした其處に何事かロマンチックな物語りを聴かされる様な思ひがする。

牛の唸り聲に目が覚める。

今朝は美しく晴れて、大變宿前の廣場に、牛が群れて、若草を喰つて居る。

C 君と二人で鳥居峠から小地藏山の方へ植物採集に出掛けた。ハ

ナイカク、コバメグサ等に見參した。小地藏山の頂から、澤づた

ひに小沼に降りて宿に歸つた。

午頃遠雷が轟々山を揺る様に響いた。

M 詩人は今朝早く山を下りられた。其空室て宿の少年を相手に遊んで居ると、S 畫家も來た。

「君おらんだ相撲をやらう」とにこ／＼して居る互に手を組んで、寝そべつて、足を引き掛け合つて、つまり敵を起すが勝ちとなるのだ。

宿の赤ん坊のKちゃん、宿のお守りにおぶさつて遊びに来る。今度は皆で子供らしい唱歌を歌ふ。五つになるKちゃんは機嫌よく唱歌につれて跳ね廻る。

おらんだ相撲は一勝一敗、一勝負毎に起き上つてお互に脚の膨らみを手で擦る。

「ハハハ、キャツ／＼」と大騒ぎに騒ぐ、近頃は宿のNさんも、少々體が悪るいといつて働くの休んで居る。湯殿で髪をとりだ。

て居ると宿の少年はランプを掃除しながらNを指して「到頭參つてしまつた」と呵々と大笑する、少年Tさんは十六才の元氣な盛りだ。



C君の下山につき、新坂迄見送つた。

私は道を姥古山に取つて、駱駝の背の如き峯を縦走する、沼平に面した方面の傾斜は秋の千草が花毛氈を敷き詰めた様に、美しく咲き亂れて居る。

姥古の山稜のつさる邊から、急峻な岩角を攀じて、鈴ヶ峯の峯頭に到着した。石楠が枝を繁らして居る、花盛りの頃は目さめる美し

さがあるだらう。

山頂には、今迄赤城山頂で見た中一番立派な木造の神殿が西向に安置してある。

五六本、木刀に住地姓名を記した物が奉納してあつた。

社殿の前に自然石の大きな平板の一枚石がある。此上で四五年前迄は各諸處の遊び者が集つて博奕を盛にやつたものだと後で始めて聞いた。岩崖とも見る可き岩塊が澤山有る、其上をクジャクテフが美しい翅を廣げて舞つて居た。鈴ヶ峯には其名を同じくする鈴蘭が大變生育して居た。

四本楯の高原迄下つて來ると、おらんだ相撲のS畫家の寫生の終

る處であつた。君とつれだつて宿に歸つた。

S君はおらんだ相撲以來足のふくらぎが痛い痛いと言つて居る。

私は午から荷物整理にとりかゝつた。

近々山を下ろうと思つた。

◎

今日も天氣はよし、夕邊とめた荷物を階下に運んで、前橋迄氷馬に積んで行つて貰ふことを依頼する。

爐邊で氷積馬を繋ぐ、駄重と呼ぶ柄の大きい右耳上に瘤をつけた特徴のある馬子と、此宿のはげ定の稱ある小男だが氣かぬ氣の五十代の爺と二人で口論をはじめた。

喧騒は家中の人を驚かした、でも元々良く知り合つた仲なので宿のTさんが、

「なんだい騒々しいやい！、こんな處で喧嘩なんかはじめて、お客様のお邪魔にならない」と、一聲するどく止めると鶴の一聲と云つた調子に御主人の御威光に二人の喧嘩も止つてしまつた、サテは大笑ひとなつて落着した。

午頃宿のNさんは病氣恢復の見込なしとて山を下る爲め挨拶に來た。

白地の單衣を着て白い脚絆を着けた様子が古い繪草紙の口繪にてもありさうな扮装であつた。



午後雨が降り出し夕方には愈々勢強く降る。雨と風が戸外に暴れ猛つて凄じい叫喚……、久し振りに自然のさけびを聴く。

○ 一日猛烈に、雨、風、霧が吹き暴れた。それでも夕方雨は止んだ、然し風は強く吹き荒れて湖上には白波が碎け合ふ、風は西風となつて来た。斯うなれば明日は疑なく晴れる。
愈々明日は懐しき赤城山とお別れてある。
○ なんとなし離愁が強く胸に迫る。

○ 暴れに暴れた山も今朝はケロリと氣分を直して又ニコやかな温容



を呈して居る。

駒ヶ岳山上の美しい碧空。白樺の雨に洗はれた艶々しい緑葉！イザ出發となればなんとなし後髪を引かれる。デモ今朝はお別れだ。宿を出るときは皆さんに送られた。

Tさんは柵の有る邊迄見送つて来てくれた。

「左様ならおすこやかに」

「有り難う！大變お邪魔しました。

『ては左様なら』

「左様ならおだいじに行かつしやれませ」

斯して別れを告げて二三步進んでは又振り返へつて『左様なら』と

繰り返へす。

十五六間後を振り向かぬ様にして進む。

高い調子で『左様なら』と最後の別れの聲がする。そつと振り向いて見ると皆で白いハンケチを振つて呉れて居る。自分は帽子を振つた。又『左様なら』と大變大きな聲で、其聲が周囲の山々に反響を起して『左様—なら—』と唸く様に山彦する。

あゝ！赤城峯々の離別の聲……………

私は鳥居峠へ向つて道を想しい想ひて進んだ……………(山内氏)

◎都から木曾駒ヶ岳まで

御無沙汰仕り候。愈々御機嫌の段奉賀候。小生寸暇を得て、去

る八月一日夜東都を後に、木曾駒ヶ嶽登岳決行に向ひ申候。勝沼驛の曙光に、車窓遙にゆくりなくも甲斐ヶ根の悠々たる山容、折柄朝暉に照し出されたる、甲州葡萄の如き紫紅色の山肌を眺め候ては、此處數年忘れられたる山懐しの感、一時に沸立つ様の心地致され候。

今朝甲斐盆地の快晴は千載一遇的にて、鳳凰、地藏、甲斐駒、金峯、八ヶ嶽の山容は申す迄も無之、車窓より振り仰ぐ、東の空に、富峯峯の裾さばき悠々たる、桔梗色の美容に接しては、この旅一人なれば共に興ずる相手も無く、車中に足踏み鳴して、一人悦に入るも哀れに御座候。

茅野驛あたりより諏訪湖を超えて、遙に穂高岳を眺め入り候、あの聳り立つ槍の峯頭はさすがに北アルプスの重鎮、何時眺めても心嬉しき姿に御座候。

下諏訪あたりより木曾駒ヶ岳を眺め候。

辰野驛にて下車、電車に乗り換へ伊那町に参り候、伊那谷深き處と思ひの外なる繁忙にて大陸地の新開地に参りたる様に感致され、これも交通機關に因る町村發達の目覺しさに少なからず驚き入り候、松葉や旅館に投宿。

旅館の欄干に倚れば、甲斐駒ヶ岳の白色爛々たる、花崗岩の霉爛せる、豪壯の山容手に取る如く眺められ、白崩の名もさこそと存せ

られ候。案内者には田中庸淑と申す若者を雇入候。此者年齢三十五六歳にて、偉軀裕に十貫の荷は負ひ得と申すも、あながち偽りならず、少々山岳名稱等に暗き嫌は有之候も、正直にして良く勞を厭はざるは、駒ヶ岳案内人剛力として充分推薦の價値有之今日迄二十回程登岳致したる由にて、日當は一日一圓程に御座候。

八月二日午前四時出發、伊那町より微明に途を辿り内の萱に出で、伊那發電所へ午前六時着、是より道を小黒川と離れて、右方へ山路に辿り入り、雑木林中を進む事一里餘にして、喬木の白骨となり淡れたる地點に參り候。今春山火事の被害を蒙りたる由に候、此邊柳草の紅雲を棚引かす花盛り誠に美觀に候。

小杭に（小芹ノヒラト稱ス、縮緬坂ト稱ス、此水野田場これト稱ス）と記す。清泉の流出する斯處に、午前八時頃到着致し候、是より頂上迄は飲用水を路傍に得難き由にて、しこたま水筒に補填致し候。

路につれ梅、樅、白檜、白樺等の森林帯と相成り。老樹鬱蒼として繁茂致し、所謂晝尙暗き感致され候。路は奈良井御料林地帯の境界點に沿ふて進み居り候。

フト案内人立ち止まり、熊よ熊よと叫ぶに少なからず驚かされ、行手を眺め候處、御料林地内の熊篋中を黒き物がサコソと逃げる様に物影を認め、好奇の心に捕はれ尙も進み候處暫くして、道邊に

烟草入の落ちあるを發見致し候。此邊御料林盜伐者入り込む由、斯
る類の人驚かせに、少々滑稽を感じ候。

山窩者なれば、又一入の興もあらんに、落ちたる烟草入はあまり
に里臭き物にて候ひき。

森林帯も早十町と申す頃、道邊の岩上に小祠を祭りあり、此邊小
岩窟多く、兎など飛び出づるに興を湧し、一二岩隙をのぞき候に、
細砂の上に碧色に輝く物を認め候。ヒカリモと申すものによ。

斯して十一時頃森林帯を抜け出て候。此處小杭に（右行者岳、左
本岳）と記したるが立ちあり。是より南は未だ這松の切り口も生々
しき新道と相成り、これを横手と案内人は申し候。先頃迄は行者岳



と相成り候。
 此邊這松、石楠、たけかんば蟠屈繁茂致し居り、愈々高峯の景趣
 と相成り候。
 正午伊那小舎に到着致し候。この小舎は將棋頭の南側に新に建設
 されたるものにて、花崗岩の礎を半間程の高さに巾三間長四間に
 築き上げ、軒迄半間の距離に横板を張り廻し、棟迄一間の高さに板
 屋根を葺き、南北に出入口を設け、兩側に四個づつ、上戸の窓を開
 き、斯て小舎の中央は半間巾に細長く土間となし、他は凡て板張り

の山嶺に出で、是より尾根傳ひに駒本岳に進みたる由、今日はこの
 横手を進む十町程にして、伊那の小舎と申す、新設小舎に行くが順
 路と相成り候。

此邊這松、石楠、たけかんば蟠屈繁茂致し居り、愈々高峯の景趣
 と相成り候。

正午伊那小舎に到着致し候。この小舎は將棋頭の南側に新に建設

されたるものにて、花崗岩の礎を半間程の高さに巾三間長四間に

築き上げ、軒迄半間の距離に横板を張り廻し、棟迄一間の高さに板

屋根を葺き、南北に出入口を設け、兩側に四個づつ、上戸の窓を開

き、斯て小舎の中央は半間巾に細長く土間となし、他は凡て板張り



の構造頗る完備せる、誠に心良き新小舎に御座候。せめて慾には一脚の机と稚子寢臺なりと備はらば、未だ見ぬ事ながらアルプス山中のシャレーとやらの小舎も斯くやと想像致され候。

棟木には新築工事發起者内三萱天狗平……大正四年九月貳日
起工同年十月十二日竣工と墨色新しく記しあり候。

小舎前は所謂偃松帯にて、偃松、石楠地を這ひ、將棋頭の屋根續きに、駒ヶ岳本岳丸味な肩を聳やかし、其左肩越しに、ピラミット型に中の岳聳え、尙左方は寶劍岳、奇魁の岩頭をヌツと突き出し、前岳尤も壯大に眼前に据り、時折白霧の湧き立ちては散逸するは、そぞろに神秘的な感胸に迫るを覺え候。

小舎の背後を少し下れば偃松の這ひ繁る岩蔭に、清泉湧き出て、ウサギギクの黄花一輪泉に影寫すなど、さすがは高峯の井戸端丈に仲々味な風情に御座候。

若し眼を遠く北にやらんか、北アルプスの連嶺雲間に巍然として、笠ヶ岳の峯頭より白馬連嶺に到る峯々を、焼よ、穂高よ、槍よ、大天井、偕は針木、鹿島鎗、尙遠く鋭き尖頭は立山の劍岳？白馬岳と叫びつ探りつ胸を躍らす愉快な壯景を展開致し、續いて東に戸隠山、八ツ岳、淺間山などの峯頭轟々として、聳り立つを指し得可く候。小舎前よりは東に當りて、甲斐駒より赤石の連嶺、所謂南アルプス雲間に削壁を築き上げ、富蓉の一際高さが仰がれ

候。

斯した山上の気分をも少し味をつけて書き、なぐつて見たく、御
笑讀願上候

◎伊那小屋にて

伊那町から登山の路々、斯程立派な(高山として)小舎に、今宵旅
寝の枕に着かうとは、期待せぬ事實であつた。

午食を済した、私と田中は輕装して、

「此處から本岳、中岳、寶劍岳に登つて、農ヶ池に廻つて又歸つて
來るには、四時間あつたら樂だろ」と是からの豫定を語り乍ら
小舎前に出た。

今日は未だ誰一人登山者に逢はなかつたが、「後から登つて來て、
小舎に泊る人は無いかしら」と私しは何んとなし、荷物を残した、
留守居の無い、小舎を出る後の不安と云つた様な、妙な里心に捕は
れて、田中に訪ねて見た。

「ナアにこの様子じゃあ今日は登山者に、逢ひますまいよ、よし小
舎に後から着いた人が有つたからつて、まさか荷物を悪さする人も
無いだ。……がからつぽだと兎の奴が必然忍込んで、飯握なんか
喫るだて、奴の氣の付かぬ様に、棟木の上に食物は乗せて置きまし
た。」

「山上の明き小舎に浸入する物は、兎だ兎だ」と私しはこんな一事

にも少なからず、興味が湧いた。

這松と石楠が雑然と、入り亂れ縁に地を敷いた上を涉つて、將棋頭に出た。是から尾根傳ひに、朝からの上天氣に、毛糸の襦衣を着た身には丁度心快い暖さを感じ乍ら、晴れ切つた行手の峯々を眺め、何等の不安を感じずる事も無く、春の野邊でも逍遙すると云つた安ん、輕快な氣分に浸りつ駒本岳から中ノ岳、寶劍岳の峯々へ向つた高峯の花に憧れ、或は遠望の宏景に無心の眼を放つて、無人の境を進んだ。花崗石の岩角に幾度となく腰を下して、農ケ池に山湖の靜寂を味はつた僕等は五時間程山上を徜徉して、五時頃又小舎に歸つた。

今宵はこの小舎の主人となつて、旅寢の夢を結ばねばならぬ。私は未だ日のある中に、田中に加勢して、二人の旅寢には廣過ぎる、十二坪程の小舎内を掃除した。時に薄墨色に霞んだ、北、南アルプス連嶺をボンヤリ眺めた。

春の遠山とても云ひたい程、柔かな感じのする空線(Sky line)を望んで、常に此等の高岳の嚴めしさに威壓される心持地も、何處か奥深く胸中に包まれて、一つ一つ山名を詮議立てする程の氣にもなれなんだ。

足もとに千島桔梗の大きな紫花が、花崗岩の輝く小砂の白さに、榮へて一際目覺しく、香つて居る夫が寧ろ、私の放心した、取

り止めもない様な心持に、一種の憧憬的注意力を強く緊いた。私は其紫の一花の下に膝づいて、目覚める程美しい高峯の花に少女の様な心持地となつて、見惚れた。聽て立ち上つて、あたりを見廻せば、ツイ後に附いて來た田中の影が見えぬ、たゞ花崗岩の霉爛した白い山肌に、高山植物の數々が翠緑を覆ひ被せた、其處等邊りが大きな庭園の様に見えた。

私一人が、ザクリと踏む細砂の音に、異様な寂寥を感じて、田中はと思つてツイ前の岩塊に足を進めてあたりを見ると、其の岩塊の傍に腰を下して、私しの携帶した双眼鏡を目にあてがつて、田中は無心に御岳から乗鞍岳一帯の宏景に見惚れて居る。今しがた感じ

た寂寥の氣分が又々閑な心持地に復活した。

此んな氣持を幾度か繰り返して、兎に角駒ヶ岳の本岳に攀り着いた。

木曾谷一面には白霧が捲れつ纏れつ渦を巻いて、時折り其一片がスツと面を掠め去つた。本岳から中岳へかけては、花崗岩があまりに裸出しとなつて、一寸河原でも歩く様な氣がする。深山薄雪草がチヨイ／＼其のフランネルの様な初な毛の生えた可憐な花を此間の白砂の中に咲せて居た。

寶劍岳を攀じ、前岳の裾を農ケ池の谿目掛けて這ひ下る。黄花の駒の爪が黄金色に、岩にしがみつく様にして咲いて居る、白山なづ

菜と云ふ珍草も此途て見た。

今夜一夜を焚き明すには、十分な程這松の枯木を、室の一隅にうづ高く集積した。

田中と私は最早何等の杞憂を心に抱く事もなく焚火を挟んで向ひ逢つた。田中の穩かな面は、這松の一燻への火影に赤々と照し出された。

「まづたく今日位穩かな日は少ねーだ」と田中は獨言ながら、夕飯を炊いた鍋から、雑炊の湯煙の立ち昇るのを茶碗に移して、私しに差し出した。

濃霧に捲れる浮身も無く、激雨に立ち盛む慘らしさも無く、暴風

に戦慄く恐怖もなく、濡れ這松の燻りに苦しむ事もない、マツチ一本で容易に燃え盛る焚火を圍み乍ら、この豫想に反した、立派な小舎に斯くして暖かな夕食を濟す私しの幸福をしみじみ感謝したのである。

食事を了つた、私は田中の草鞋を改造して呉れた草履をつつかけて外に出た。小舎前の岩に腰打ち掛けて無心に伊那方面の雲海が北へくと崩れ昂る宏景を眺めた。

八千尺の高峯は今次第に夕霧に包まれはじめ、這松、石楠の波を超えて、ヌツと小舎前に聳立する本岳の丸味な肩超しに、中岳のピラミット型した頂上を越へて、其東方に寶劍岳が不整形な澁面

をニユツと突き出し一番眞近に農ケ池の凹地を越して、前岳が廣い肩を怒らかして聳え此等の山々は一刻／＼と夜霧の静寂の幕に閉ざれはじめた。

谷から湧き昇る夕霧が面をヌツと掠める、夫が丁度大岳の呼吸の様に思はれた。ツイ小舎上の將棋頭の峯上に二日月が淡く輝いて居る。伊那谷から湧き立つ夜の幕は北へ／＼と急速に綿雲はモクモクと狂奔し亂舞しはじめた。

遙か北アルプスの黒い一連の魁姿は一秒／＼と其裾を雲海に没しはじめ、一際叢ら立つ怪雲がヌツと舞ひ昇ると見る内に穂高岳の廣い肩に幕を閉じた。尖鋭な槍の峯頭がニユツと尖塔の様に其山容を

天空に聳立て迷宮に落ち行く、宏壯な北アルプスの方向は此處で御座いと云つた顔つき……私しは默然とこの物々しい、天界の夕暮の動搖に魂を打ち込んだ。

小舎の東向の戸口の上方に、切り開けた明り窓がバツと明るむ。田中が一枝の這松を燃したと見えて、微かに火の燃え盛る音が聴えた。

「今夜は早く寝る方がエ、ぜ、夜半になると寒くなつて、眠れねへだから」と田中が小舎から顔をさし出した。

「まア一寸出てみたまへ、あの雲の海を見ろよ」と私しは穩かな高峯の雄大な夕暮の景趣に、興奮しきつて云つた。

夜鷹がスイと一羽頭上を天翔る、そして今や駒も寶劍も薄れてしまつた。天空には北斗の輝きは燦然として美しい……大正二年八月駒山麓なる某小學校長以下數名この山嶺で、遭難に逢ひ登山に對し貴重なる犠牲を拂つたと云ふ事實も、斯うした穩かな夕暮には全て、よそ事の様な氣がされた。大王の怒號叫喚が激烈な丈、穩かなる大王の溫容は、心から親し味を覺えさせる。そして私しを只詩興に弄ぶのみだ。

一度憤怒せば、巖塊も蹴飛ばし暴るゝ、高峯大岳のさても今宵の静けさよ。足下にある黄花の石楠の一枝には球の如く花叢を咲かせて居た。(山内氏)

(本稿は淑女畫報主任須藤莊一氏が特に著者の爲めに寄稿されたもの、行文流麗、興趣横溢、三讀猶且つ津々たり)

◎乙女峠を越えて (箱根)

『一』はしがき

夏が来た！爽やかな若葉風に頬を吹かれつゝ、白雲搖曳する蒼空を望む心地よさ。それも暫し、やがてギラ／＼と太陽の熱光に都會の藁が火のやうに燃えて、汗が止めどなく額に流れ、腋下を潤す頃になると、皆な思ひ／＼に或は高原に涼を追ひ、或は海濱に暑を避ける。

我れ、當然ならば、紅塵萬丈の編輯局裡に、苦熱と戦ひつゝ筆と

るべき身ながら、斯くては餘り智恵が無さ過ぎると、脳味噌を絞つて考案に及んだ一策がある。——幸ひ、受持の雑誌が上流家庭相手の書報なので、各避暑地の名流を寫真にとつて、口繪にしますといふのが、即ちそれ。斯くして、マンマと自腹を痛めぬ社用旅行に有りついたが、職務とあれば流石に氣苦勞は絶えない。責任を忘れぬところ、此の男中々殊勝なり。

さても、苦肉の策の避暑地めぐり、職務半分、慰み半分、はたから見れば『ヤツうまくやつてる』と思はれるかも知れぬが、其の第一回を信州輕井澤に試みた折の如き、慰みどころか散々の氣苦勞、こんな筈ではなかつたがと、見當ちがひを悔ひても及ばず、第二回は

河岸をかへて箱根に向つたが、一週間の旅行を六日半といふものは雨に降られ、這ふ／＼の體で歸つて來た。

第三回は、凝り性もなく再び箱根へと志したが、去年と同じ道筋では根ツから興がないといふので、今度は御殿場方面から乙女峠を越えやうといふ計畫。——茲に記すは、即ち此の第三回の寫真行脚と御承知下さい。

『二』 高原の老鷲

同行は例によつて寫真師K君。之れはまた二十五歳の青年ながら、其の技術は堂々たる大家そつちのけ、殊に出寫に於いて臨機應變、如何なる難物をも無事にやつてのけるところ、雲水の處さだめ

ぬ我等が行脚には誂ひ向きてある。

八月一日早朝。微雨を冒してK君、僕の居に至る。

「お早う。今年も雨かしら、去年は全く閉口しちやつたね。」と僕はいよげる。

「何、此の分なら大丈夫です。まさか去年の様なことは無いでせう。」と、K君は空を仰いて同じく不安の面色。肩にかけてズツクの寫真器函を重さうに揺り上げた。

「ぢやア兎に角出かけて見るかね。あまり降るやうだつたら途中から引返へすとしてね。」と、僕は旅行服に蝙蝠傘一本の身軽な扮装で庭に出る。

汽車は神戸行、品川を過ぎる頃雨はカラリと晴れて青空が見え出した。しめた！僕は心で叫んだ。神奈川を過ぎる頃、

炎天や煙突黒光る浦の町

窓から富士を見たの、山北驛で名物の鮎のすしを食べたのといふやうな月並の文句は一切省略、直ちに午後二時、御殿場に着す。折から富士登山の季節なので、停車場を出ると、それらしい連中が例の六角杖に莫塵と笠菅に身をかためて、彼方にも此方にもウヨウヨしてゐる。車中でも水兵が三人、登山して吉田口から甲州の故郷へ歸るといつて居た。

僕等は其連中と別れて、道を右に取り、乙女峠下の東山へはどう

行つたらよいかと、逢ふ人毎に聞いて行く。

此の東山といふのは、近年開けた避暑地で、西洋人のキャンプを初め、二三名士の別荘もある。

僕等が此處に來た第一の目的は、即ち此等の別荘に名流家庭を歴訪することであつた。

かねて、文學博士加藤玄智氏が此處に別荘を造り、其の風光の佳絶なるを、御自慢だと聞いて居たので、自轉車を走らす若い衆に逢つても、牛牽いて行く草刈女を見ても、

『一寸うかゞひますが、加藤さんの別荘はどこら邊でせうか？』
教へられるまゝに、街道から左へ露草しげる小徑へ折れて行くほ

どに、又しても徑が四つに岐れて居る。

草いきれ泡ふく牛のうなだれて

どちらへ行かうかとイめば、丁寧に指した手を書いた木の札に、
基督教青年會夏期講習會場！ 兎も角も、そこへ行けば何とかな
るだらうと、札の教ゆるまゝに小暗い杉木立の下を進むに、苔のし
めりが心地よく足にさはる。

高原の夏は、風さへいと冷かに、杉の奥では鶯が頻りに鳴いて
居る。

老鶯や杉の木立の小暗さに

やがて木の間を洩れてキラ／＼と光るものがある。それは周圍二

三十町の沼であつた。岸の彼方には纜ひした小舟も二三浮んで居る。

尋ねる加藤博士の別荘は、つひ其の沼のほとりに建てられた草葺の孤屋、南に青葉と杉に掩はれた乙女山を負ひ、北は件の沼を隔てて近く富士の雄姿を望む。其の秀麗なる山容が、静かな沼の水面に倒影を浮べて尙ほ且つ玲瓏と照り輝いてゐる。なるほど聞きしにまさる絶景よと、二人は汗拭く事も忘れて、暫し沼のほとりに佇んだのである。

加藤博士は九州地方へ御旅行とかて、奥様と坊ちゃん方がお留守番をして居られた。そこで、寫真行脚の次第を話して、皆さんに屋

後の沼近き草原に立つてもらひ、雲の帯した富嶽を背景にしてカチリ、首尾よく一枚撮影に及んだ。

それから、つひ御近所に帝大文科の立物井上哲次郎博士の別荘があるといふので、早速押しかけたが、まだ少し早いので博士等はお見えにならず、坊ちゃんとお嬢様丈けなのを、お庭の白百合の傍へ引張り出して、又もカチリ。

更らに三四丁離れて雪嶺三宅雄二郎博士の別荘があると聞き、訪ねて見たが、草の戸はまだ釘づけにされて垣間見る庭には夏草が處得顔に生え茂つて居る様、あはれに氣うとく、早々に引きかへす。

再び街道に出ると、福岡子爵令嗣秀猪氏の別荘があると先刻加藤家て聞いたのをたよりに、そこらをウロ／＼してゐると、向ふから書生をつれた一人の紳士がやつて来る。どこやらで見かけた顔だかと、先に立つた僕は首をかしげた。それも道理、之れこそズツと以前一度お目にかゝつた福岡氏である。行き合つた時、

『失禮ですが、福岡先生ではございませんか。』と、僕は直立不動の姿勢を取つた。紳士も立止つて、

『さうですが、あなたは。』と、迂散らしく僕の頭から足下まで見まはされる。よくある、斯うした別荘地めぐりの物質乞食の類と思はれたのか、然し、今はそんなことに屈托してゐる場合でない。名刺

を出して來意を述べると、氣輕な御前。

『僕はいやだが、別荘へ行つて家内や子供に私が寫つしてもらへと云つたと、さう云つて御覽なさい。幸ひ、今西洋人のお嬢さん方も遊びに來てゐました。』と云ひおいて、ステッキふりつゝ散歩に向はれた。

委細承知した僕等は、黒塗二階建の、まだ木の香新しい福岡氏の別荘の入口に立つてベルを押した。出て來た女中を通じて押問答二三回あり、『然らば裏へまはれ』とあつて、青々とした芝を植えつめた廣やかな後庭にまはされた。仰げば、早や暮色を帯びた乙女山が青く杉木立の間に見える。此處で寫してしまへば、日のあるうちに

彼の山を越してしまはねばならぬが、……斯う思ふと心が急ぐ。
 來客の方などませて、お嬢様方はかり四五人をズラリと芝生にな
 らべて寫したのは、それから三十分ばかり後であつた。

『三』 大冒険

福岡家を辭して、門前まで出た時、植木屋が垣根を繕つてゐたの
 で、

『どうてせう、之れから乙女峠を越さうと思ふが、日があるてせう
 か。』と、僕は懷中時計を見ながら問うた、もう五時である。名は優
 しい乙女峠でも、兎に角天下の嶮として知られた箱根の裏門であ
 る。それを未だ一回の經驗もない者ばかりで、此の日ぐれを目がけ

て越さうといふのだから、我れながら躊躇された。その植木屋の返
 答如何によつては、厄介ながら再び半里ばかりの道を御殿場に引か
 へして宿らねばならぬと考へたのである。

『さア、二時間もあれば樂に越されますけれど、日が暮れちや一寸
 難儀てせうぜ。』と、植木屋は手を休めた。土地の者でさへ危ぶんで
 ゐたものを、僕等は『何の』といふ血氣の勇と、單調な街道を御殿場
 へ引かへす面倒を厭ふ心とから、つひ峠越えを斷行しやうと決心し
 たのである。今から思へば随分無謀であつた。二時間で越せるな
 ら、七時には先の宿につくことが出来やう、
 『今日のうちに越してあげば、明日は箱根へ出られて大變都合がよ

いからぬ。少し無理でも越してあかうか。」

斯う僕が云ふと、K君も、

「さうです、大丈夫ですよ。僕なんか秩父山の探険に行つて徹夜したこともありすが、その事を思へば、こんな山など何でもありません。」と元氣なことを云つて居る。

二人は話しながら爪先上りの坂道にさしかゝつた。ふりかへれば夕陽に紫匂ふ富士の姿が近々と望まれる。少し行つては振り返り、少し登つては振り返りして、刻々に變化して行く富士の色を賞した。溪流の音が次第に遠く微かになる。

御殿場から箱根へは陸軍の砲車が通ふので、それに適當な勾配の

巾広い道が、うね〜とついて居るが、それを進んでは、どうして二時間や三時間では越されない。それ故、途中十五六丁も登つた處で左側に標木が立つて「舊道乙女峠道」と書いてあるから、それを登らねばならぬと、先刻の植木屋に教へられたのである。

山百合や是れより左舊街道

やがて御殿場の街の灯が目下に見えるやうになつた。そして富士の姿は紫紺色に變つて、暗碧の空に巍然として威壓するやうに聳えてゐるのが、僕等の眉に迫る。

さら〜と青葉を吹いて来る山嵐が、冷々と氣味悪く襟にしみる。いつしか日は暮れて、眼下の御殿場の灯が群がる螢のやうに微

かに明滅する。それまでキラ／＼と杉林がくれに輝いてゐる東山湖
(加藤博士家の前にあつた沼)も、もう光を納めて鈍色になつた上を
幽霊のやうな一朵の霧がフワ／＼と浮動してゐる。

「君、乙女峠道の標杭はもうありさうなものだがね。」と、僕は立止
つて、少しおくれたK君を振りかへつた。

「さア、もうあるてせう。——それ其處の先に見える白いものは何
です。

『どれ／＼。』と、僕は走りよつて見ると、虎の伏したやうな石であ
つた。

又少し行つて、左側を見ると、雑木に埋れて暗くなつた穴のやう

な處がある。其の入口に、古びた杭が立つてゐる。もう日はトツプ
り暮れてゐるので、其の文字が讀まれぬ。隣寸を磨つて、やつと乙
女峠の入口は其處であると分つた。

「四」 死生の境

その荒涼たる舊道の有様を見た時、僕はいつそ引かへさうかと
思はざるを得なかつた。

けれども、考へて見れば引返すのも大變である。今引返す程なら
東山の別荘地から何故引かへさなかつた。十五六丁もウン／＼云
つて登つて、今更ら引返すとは餘りに意氣地がないやうな心もす
る。

「どうだ。大變な道だね。」と、蝙蝠傘の先きで暗の小徑を索りながら、小さい聲でK君に云つた。

「まア行けるところまで行きませう。然し咽喉が乾いて堪りません、どこか水を飲むやうなところはないでせうか。」

「谷の底の方で水の音がするやうだね。——でもウツカリ覗くと千仞の谷へ轉がり落ちるから用心しなくちやいけないぞ。」

淋しいので景氣づけに大聲で話しながら進む。道だか涸渴して溪川だか分らない。雨水に穿たれて、深い溝が出来、大小の礫が一面に磅礴してゐる。それを唯だ探り／＼に辿るのである。高いと思つて進んだところが、案外窪地であつたり、安定の石だと思つて踏ん

だのが意外にもグラ／＼と揺いだりするのはまだしも、思ひも寄らぬところに小高い崖があつて、僕はアナヤと思ふまにズンデンドウと轉げ落ちた。

「ア—どうしました。怪我はありませんでしたか。」と、K君の聲を便りに、叢の中をモグ／＼這ひ上つた僕、

「ヒドイ目にあつたよ。然しね幸ひに怪我はなかつた。」と、もう塵を拂ふ勇氣もなく、咽喉が渴いて聲が枯れるので、スタコラ／＼と話も碌々しないで急坂を攀ち登るのであつた。

K君は又しても遅れる、道の半町も行かないのに、後から情ない聲を出して、

「休やすまうぢやありませんか」といふ。

日が暮くれてから、もう餘程時間よほどじかんも経たち、大分道程だいぶみちのりも登のぼつた筈はずであるのに、峠たふげと見ゆる山の絶頂ぜつちやうは、遙はるかの頭上つじやうに透すかされる。

トンネルのやうな雑木ざんぎの下道したみちを、ウネ／＼とまがりつゝ登のぼるうちに、時々小高い見晴みはらしのよい處ところに出る。その都度つど僕は振返ふりかへつて富士を見みると、雲くもの徂徠そらい急きふなる開夜あひよの空そらに、鬱然うつぜんとして其の偉容ゑいようを整へて居る。その麓ふもとには御殿場ごてんばの灯ひが火ひの子こを散ちらしたやう。蓋けだし、斯かくの如ごとき壯觀さうくわんは珍めづらしいものであらうが、僕は疲勞ひらうと渴かつと飢うゑとに苦しめられ、景勝けいしょうを賞しょうする餘裕よゆうなどはテンデないのである。

K君くんの休息きゅうそくを要求えうきうすることは、愈々いよ／＼早はやくなつて、一度腰ひとこしを据すえた

ら、容易よういに動うごかぬ。

「もう、此この儘夜まよを明あしませう。ねえ、僕はトテモ行ゆかれない。」と病牛びやうぎゆうの如ごとく、枯草かれくさの上に横よこはつてフ／＼苦くるしい息いきを吐はいて居る。

「二時間にじかんかゝれば樂らくに越こされる」といふ言葉を信しんじて、食たべるものはパンの一つも持つて來こなかつた。されば、お晝ひるに汽車中きしやうちゆうで少量せうりやうの辨當べんたうを買かつて食たべたばかり、飯粒めしつぶ一つ、水みづ一滴てきつの飲のまないで、茲こゝまで登のぼつたのである。渴かつも覺おぼえやう、飢うゑも迫せまらう。

「さア、行ゆかう、君きみの荷物にものは僕ぼくが持つから、兎とに角かく、峠たふげの上うへまで行ゆかう。あすこには繪ゑハガキで見みると茶屋ちやいがあるやうだから、お茶ちやも飲のみ、何か菓子なににかでも買かつて食たべて元氣げんきを恢復くわいふくしやう。——何なにしろ此こ